
魔法少女リリカルなのはstrikers ～聖王の刃～

RE360

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 　　～聖王の刃～

【Nコード】

N 1 1 7 3 X

【作者名】

R E 3 6 0

【あらすじ】

新暦65年、冬。

丁度闇の書事件が解決されたと思われる時期に、少年はミッドチルダへとたどり着いた。

彼は武装隊第四陸士訓練校へと入校し、とある少女と出会う事になる。

そしておよそ九年後、新暦75年9月30日

試験運用の期日が迫りつつある機動六課への出向が決まった。

笑いにシリアスに恋愛、どれも描くのは初めてですが出来るところ
まで頑張っ て行きます！

キャラクター詳細設定（前書き）

主人公等のオリキャラ設定を随時更新していきます。
ネタバレしてしまう可能性がありますのでお気をつけ下さい。

キャラクター詳細設定

名前 シード・ウェンハイム

年齢 18歳

身長 161cm

瞳の色 碧眼

髪形 茶髪 長くもなく、短くもなく 癖毛

出身世界 ?

所属 管理局本局航空武装隊1321部隊↓機動六課(出向)

役職 武装隊所属空戦魔導師

階級 二等空尉

魔力ランク AA-ランク

魔導師ランク 総合AA+ランク

魔法術式 近代ベルカ式とミッド式の混合

魔力光 翠 (ユーノよりも色が濃いめ)

好きなこと… 食べること、体を動かすこと

苦手なこと…デスクワーク

備考

なのはやフェイト達とは士官候補生時代からの関係。

性格は、普段はおとなしく武装隊の中でも弱そうに見える優男だが、魔導師ランクからしてそこそこの実力者。

基本は近代ベルカ式だが、ミッドチルダ式の魔法等も混ぜて使う。

レオンとは同じ部隊の隊長と部下の関係。
なんだかんだ言いながらも尊敬している。

デバイス アブソリュート

日本刀型のアームデバイス。

白銀を基調とした色、刀身に金の装飾。

待機状態のフォルムは白銀のロザリオ。普段は首にかけている。

カートリッジシステムはレヴァンティンに酷似しており、峰の根元に付いている。

バリアジャケットは、インナーが黒ということを除けば14歳の頃のエリオのバリアジャケットとほぼ同じ。

名前 レオン・トライバル

年齢 27歳

身長 184cm

瞳の色 黒色

髪形 真つ赤な髪色

所属 管理局本局航空武装隊1321部隊隊長

役職 武装隊所属空戦魔導士

階級 三等空佐

魔力ランク AA-ランク

魔導士ランク 総合S+ランク

魔法術式 古代ベル力式

魔力光 赤

備考

階級が下の人には少し偉そうな態度をとる事もあるが、根はいい人（と信じたい）

ゲンヤとは、過去に上司と部下の関係で、今でも尊敬している。

ティータとは同僚であり、数少ないティータの理解者。

シードとは同じ部隊の隊長と部下の関係。

シードの接し方はかなり適当な時もあるが、シードの事は自分の部隊の秘蔵っ子と考え、期待を寄せている。

なのはの事は、四年前（なのは15歳）のとある事件の時に一緒に事件解決したことで知り合った。

NO・1 機動六課への出向（前書き）

どうもこんにちは。

RE360と申します。

このお話に興味をもっていただきまことにありがとうございます。

自分はこれが初作品なので上手く書けてないと思いますが、一応連載させていくつもりなのでよろしくお願いします。

NO・1 機動六課への出向

晴れ渡る、素晴らしい青空。その青空の下、4人の少年少女が仮想訓練場を疾走していた。混合比は女性3人男性1人。

足には、マフラーの着いたインラインスケート型のデバイスに、右肘から手にかけて重厚な籠手型のデバイスを身に付けた、白いハチマキに青い髪 of 少女。

オレンジの髪を2つに纏め、手には拳銃型のデバイスを持ち、気が強そうな少女。

4人の内、唯一の少年の手には、少年の身の丈程もありそうな槍型のデバイスを手には、赤い髪を揺らして息を切らしている。

白い帽子に特徴的な桃色の髪。息を乱して、一生懸命走っているこの少女の隣には小さな白い竜が並走していた。

4人が懸命に走る理由は

ズガアアアアン！！

という爆発音と被害をもたらす誘導制御型の射撃魔法から逃げるため。

そして、魔力弾を撃ち、制御して4人に当てようとする女性が4人の頭上にて飛んでいる。

「ほらほら！1つに固まらない！！それじゃ”撃ってください”って言ってるようなものだよ！」

上空には、長い茶髪を二丈に纏め、白を基調とした服を身に纏う女性の姿。その手には杖型のデバイスを持ち、彼女のサポートをして

いる。

「次、行くよー!!」

『アクセルシューター』

上空の女性がデバイスを構えると、およそ30発もの桃色の魔力弾が発射される。それら全てが命中すれば、先程からの威力を考えてもかなりのダメージとなるだろう。

その瞬間、オレンジの髪の少女、ティアナは他の3人に念話を使い話しかける。

「（スバル！エリオ！キャロ！さっき話した通り行くわよ！！）」

「（うん！！（はい！！））」

命令をだしている所を見ると、恐らくティアナがこのチームの司令塔的立場なのだろう。

スバル、エリオ、キャロと呼ばれた3人は同時に頷く。

だが、次の瞬間に先程発射された魔力弾が衝突、爆発し、土煙を生させる。

上空に居る女性、高町なのはは魔力弾の命中確認をしている。しかし、土煙の中には2人分のシルエットしか見えなかった。

「ストラーダ！フォルムツヴァイ！！」

『デューゼンフォルム』

そして、土煙の中から出てきたのはストラーダを使ってなのはへと飛ぶ赤髪の少年、エリオだった。

なのはは、空いている左手を使い防御魔法、プロテクションを張る。攻撃の速さや威力からしても、恐らく桃色の髪をした少女、キャラのブーストデバイス、『ケリュケイオン』によって強化されているのだろう。

「うおおおおおおお！！！」

「うん！悪くない攻撃だね！！」

エリオは全身全霊で攻撃を仕掛けてくる。だが、なのはは疑念を抱いていた。

土煙の中、人影が2人分しかなかったこと。

そして、何故エリオは先程の魔力弾によるダメージが無いのか。

ガードウィングのポジションであるエリオは、攻撃を防御するより、回避することを中心的に教えてきた。

かといって、あの魔力弾を回避した形跡は無い。

「……と、いうことは……………」

ふいに、なのはは右手に持つ杖型のデバイス、『レイジングハート・エクセリオン』でプロテクションを張る。

その直後、

ガギイイイン！！！！

という音と共に青い髪に白いハチマキの少女、スバルのデバイスである、『リボルバーナックル』と、なのはのプロテクションが衝突する。

「くうっ！…防がれちゃったか！」

「なるほど……土煙の中、人影が2人分しかなかったのはティアナとキヤロが、最初からティアナの幻影魔法、フェイクシルエットによるものだから。そして、エリオが無傷だったのはフロントアタッカーとして防御魔法を叩き込まれたスバルが防御したから。その隙にエリオはストラダーで私に攻撃。その間にスバルは、ウィングロードで私の背後に回って、エリオと挟撃。」

そして、なのはは周りを見回して、ビルの屋上に立つティアナの姿を捉える。

「そして、2人の攻撃をガードしている間に、ティアナの射撃魔法で撃墜、つてところかな？」

なのはの推測は毛ほども間違っていないかった。

エリオとスバルの攻撃で両手を塞がれた状態では、3人目の攻撃は防げないのでは？

という、ティアナが立案した作戦だ。

そして、現在までの流れは予想通り。そして、決め手の、3つ目の攻撃を繰り出すためティアナは、魔法の準備をする。

「クロスファイア………」

ティアナの足下にミッドチルダ式の魔方陣が展開される。すると、オレンジ色の魔力弾が10発程出現する。

「シュートオ……！」

ティアナの声と同時に、魔力弾がなのはへと飛ぶ。だが、なのはの

顔からは余裕が消えなかった。

『バリアバースト』

レイジングハートによるコマンドによって、スバルとエリオの攻撃を防いでいたプロテクションが爆発する。2人は、吹き飛ばされながらも体制を立て直す。

そして、爆風の中に残ったなのは左手を前に向け、足下にミッドチルダ式の魔方陣を構成していた。
すると、左手の周りに桃色の魔力弾が8発程出現する。

「クロスファイア…シュート！」

ドオオオオン！

そして、桃色の魔力弾がオレンジの魔力弾を撃ち落とすべく射出される。同じ魔法でも使い手が違えばそれだけ威力にも差が出てくる。なのははティアナより少ない魔力弾で、ティアナの魔力弾を全て撃ち落としてみせた。

（この状況で、何か勝てる策は……………）

ティアナは懸命に考えるが、この状況でなのはに勝てる策など欠片も考え付かない。

そして、なのはの周りの爆風もようやく晴れる。

「っ！！」

ティアナは絶句した後、両手を上げて降参の意を示す。
そこには、クロスファイアシュートを何時でもティアナへと撃てる

ように構えている悪m……… もとい、なのはの姿。
スバルとエリオは反撃しようにも、フープバインドによってすでに拘束状態。

キャラも基本的に支援に徹しているため、この状況では何も出来ない。

スバルとエリオは、バインドを解いてもらい、ティアナとキャラは降参して、4人とも地面に降り立ったなのはに集まる。

「悪くはなかったけど、やっぱり詰めが甘いかな。相手がどんな魔法を使ってくるか分からない時は、もっと慎重に行かないと危ないよ?」

そしてFW陣の4人は、それぞれアドバイスをもらう。

流石は教導官と言うべきか、全員に的確な助言や作戦の見直し等に無駄が無かった。

FW陣が練習していた訓練場から、少し離れたビルの上。

そこには、管理局の制服を着た2人の男女が、モニター越しにFW陣の練習風景を見物していた。

「どう?機動六課の訓練は?」

片方は綺麗な金色の長髪に、赤い瞳の女性。
フェイト・T・ハラOWN執務官その人だった。

「そうですね……………なのはさんは流石管理局のエースオブエース、
といったところでしょうか。模擬戦を見るかぎりでは、」S事件の
後遺症が残ってるとは思えませんね。」

フェイトの隣でモニターを見ているのは、茶髪に青い眼、フェイト
と同じくらいの身長 of 管理局武装隊の男性隊員。

「あっちの4人……………FW部隊でしたっけ？あの4人のチームプレ
イもかなり出来上がってますね。」

そして、男性隊員はFW陣のメンバーを一通り見回して、キャロに
眼を止める。

正確には、キャロの側に居る小さい竜をだが。

「フェイトさん……………あの女の子って……………」

「どうしたの？もしかして……………ちょっと気になる？」

「……………はい……………召喚魔法の類ですか？」

「うん……………キャロは竜召喚士。基本は自分のブーストデバイスでフ
ルバックの役目を果たしてるけど、実戦では竜使役っていう特殊技
能で戦ったりもしてるんだ。」

「成る程……………あの竜はそういうことか……………」

「えっと……………そろそろ本題に入ってもいいかな？」

「あ……………すみません……………」

フェイトは、コホンと咳払いして本題へと入る。

「シード・ウエンハイム二等空尉。現在所属中の航空武装隊の班長の方たちには話を通してありますから、後はあなたの判断におまかせします。」

男性隊員、シードは眼を閉じ迷うこと無く答える。

「了解しました。本日付で、遺失物管理部、機動六課へ出向させていただきます！よろしく願います。」

すると、フェイトは屈託の無い笑顔で答えてくれた。

シードはこれからの生活や、なのはの厳しい訓練を想像しながら眼を見開く。

NO・1 機動六課への出向（後書き）

どうでしたでしょうか？

なのはやFW陣の訓練風景を眺め、六課の引き抜きに応じるか考えるシード、というようなのをイメージして書きました。

シード「あの……僕一応主人公なのに出演少くないですか？」

RE360「大丈夫！今後もつと待遇悪くなる可能性大だからb」

シード「マジですかっ！！？」

フェイト「あはは………シード頑張つてね……」

という訳で、次回は遂に主人公のちゃんとした出番が！なのはさんの楽しい楽しい訓練がシードを待ち受ける！かも？

シード「ハッキリさせてから書いて下さいよ！」

NO.2 新しくも他愛ない日常（前書き）

やっと執筆終わりました！

誰か読んでくれている方がいらっしやるのかどうか分かりませんが、出来るだけ一週間以内に更新させたいと思います。

NO・2 新しくも他愛ない日常

何も出来なかった。

しなかったんじゃない。出来なかったんだ。

もっと強ければ、守りたい人を守れた。

力が欲しかった。

たった一人、大切な人を守るなら何にでもなってる。

だから……だから……

「……………シード？」

「……………」

「シード？」

「……………」

「シードさーん！？」

「え、あ、はい？なんですか？」

ここは仮想訓練場のビルの屋上。話しているのは、制服姿のフェイトとシードの2人だ。

「どうしたんですか、じゃないよ！ボーツとして、どうしたの？」

「いや、大したことじゃ無いですよ。昔の事を思い出ただけですから。」

「そっか……でもシードって普段からたまにボーツとしてるから危なっかしくてしょうがないよ。」

「そうですか？」

「そうだよ。初めてシードに会った時なんて壁に頭ぶつけてたし。」

「え？そんなことありましたっけ？」

フェイトはクスクス思い出し笑いする一方、シードは中々思い出せず、頭を抱えていた。

「あれ、もうなのはさんとFW陣の四人、訓練終わったみたいですよ。」

そう言ったシードの視線の先には、なのはとFW陣の四人が談笑しながら隊舎へ向かっていると、なのはがこちらに気づき手を大きく振ってきた。

それに気づき、シードとフェイトも手を振りかえす。

ほんの一瞬だったが、フェイトの顔がものすごくにやけていたのを

シードは見逃さなかった。

「それじゃあ私達も隊舎に行こうか。」

「はい。」

そして、シードとフェイトも後を追うように隊舎へと向かっていった。

カチャカチャカチャカチャ

.....

「あれ、皆さん食べないんですか？」

シードの問いに答える者はいなかった。

早朝訓練も終わり、なのはとFW陣、フェイトとシード達の朝食の時間となった訳なのだが、シード以外料理に手をつけず一ヶ所のみを見続けていた。

その視線の先にあるものは、シードの両脇に積まれた料理の数々。

「シ、シード君……相変わらず、というかパワーアップしてるね……」

……」

「うん……私も引き拔きの話するために食事に誘った時はビックリした……」

なのはとフェイトが呆れるも、シードは耳を傾ける事なく食事に熱中していた。

料理は、山盛りのパスタにサラダ、ステーキの様なものから、何故かカツ丼まである。

「シード君…御飯も良いけど自己紹介しなきゃダメだよ?」

「もあ?……………モシャモシャ……………ゴクツ……………す、すみません……………
ここの料理美味しくて。」

（（（リ、リスみたい……………）））

料理を口いっぱいに含んだシードを前に、全員の思考が一致した瞬間だった。

「えーと…初めまして。武装隊から出向という形で機動六課に配属された、シード・ウェンハイム二等空尉です。よろしくお願いします。」

パチパチパチパチ

すると、FW陣の四人が立ち上がり、順番に挨拶する。

「スターズ分隊所属、スバル・ナカジマです。よろしくお願いします!」

「同じく、ティアナ・ランスターです。」

「ライティング分隊所属、エリオ・モンディアルです!」

「同じく、キャロ・ル・ルシエです。よろしくお願いします。」

「よろしく。あと、提案なんだけどスバルとティアナは年近いんだから敬語無しにしない？こそばゆくて仕方ない。」

「そう？それじゃあタメ口で……………」

「ちょっとスバル！いくらなんでもそれは失礼でしょ！！」

「でも本人が良いって言うてるんだし大丈夫だよ。」

「うっ、それはまあそうだけど……………」

「じゃあ決定だね！改めてよろしくね、シード！」

「うん、よろしく、スバル。さて、ティアナはどうかなあ？」

シードは疑問系で話しているが、眼は提案の否定を許さない、と頑なに主張していた。

「うう、分かりませ……………分かったわよ！これで良いんでしょ！？」

「…………ティアナってツンデ～」

「何か言った？（ニコツ）」

「何でもないです、すみませんでした。」

シードは危険をいち早く感知し、即座に最も安全な行動へと移る。

その素早さは、食堂にいる全員が感嘆の息を洩らす程だった。

「あはは。何だかんだ言ってティアもいつも通りじゃん!」

「う、五月蠅い!上司の命令なんだからしょうがないじゃない!」

「命令じゃなくてお願いのつもりだったんだけど……………」

スバルに指摘されシードにまでダメ出しされてしまい、ティアナはばつの悪い顔をする。

「とりあえず、御飯食べちゃおうか。速くしないと時間無くなっちゃうよ?」

真っ先にシードが食べ始め、それを皮切りに皆朝食を食べ始める。

「ちょっと待てえい!!!!」

!?!?!?

謎の怒声に、全員が声の発生源を向く。

「うちを忘れとるんやないやろなあ!?!」

関西弁で喋る機動六課の課長、八神はやてが盛大に声を上げて、皆が座っているテーブルへと向かっている。

「あつ、はやて……………」

「ふあやへ、ひはひふい。(はやて、久しぶり。)」

「ええい！！モゴモゴ五月蠅い！なんや、私の事忘れとったんか！
？うちなんか誰かが思い出さないかずっとその影で待ったん
やでー！！滑稽やろ！？笑いたきや笑えばええねん！あーはっはっは
ってー！！」

「モシヤモシヤ……ゴクツ……はやて某自虐女スパイとキャラ被って
」……」

「キーク！！」

ガンッ！

「きよげ！」

はやてに蹴り飛ばされたシードは、三メートル程宙を飛び、地面に
叩きつけられた。

「はあ、はあ、はあ、上司に挨拶もせずにあたりと御飯とは……
……ずいぶん立派な性格しとるなあ。」

ピクピクと痙攣しながら床に突っ伏しているシードに向かい、皮肉
をこれでもかと言いつ放つはやて。

すると、シードの痙攣が止まったかと思いきや、ボソツと言。

「……………チビ狸……………」

ブチッ

何かがキレる音がした。

「あんやとお！！？もおいつぺん言ってみいや！！？」

「チビ狸って言ったんだよ！！文句あるかぁ！！？」

「あるに決まっとするやる！！上司に向かってその口の聞き方……ケ
ン力売っとんのかぁ！？」

「そうだよ！！御託並べずにさっさと来い！！」

そして、二人は完璧に臨戦体勢へ入った。

F W陣の四人は上司二人の喧嘩におろおろしているが、なのはとフ
エイトは呆れ顔で二人の喧嘩を見ていた。

「なのはさん、二人の喧嘩止めなくて良いんですか？」

「まあ、スバルの言うことはもっともだけど、あの二人の喧嘩も見
慣れちゃったし、私達が止めなくてもすぐ終わるよ。」

「……？？？」

なのはとフェイトの二人は食事を取りながらシードとはやての喧嘩
を微笑ましく見物しているが、F W陣は何が何だかよく分からず、
頭からハテナマークを出していた。

「やるんか！？」

「やるのか！？」

……

場は静まり返り、喧嘩腰の二人がにらみ合う。

「「ぶっ……………」」

「「「「えっ?」「」「」」

「「あっはははは!」「」」

先程まで一触即発の二人が突然笑い始め、四人とも驚き、言葉を失う。

「いやあ、シードとこうするんも久し振りやなあ。元気にしとつたみたいやな。」

「おかげさまで。はやても元気そうだし、少し安心したよ。」

……………

「えっと……………どういう事、ティア?」

「さ、さあ……………スバルは分かる?」

「さっぱり……………」

スバルとティアナはお互いに質問しあうも、結果は無い。

エリオとキャラに至っては、突然親しそうに話すシードとはやてを見て、理解不能、といった感じた。

「だから言ったでしょ?あの二人、いつもこうなの。」

先程のなのはの言葉通り、止めに入らなくても勝手に仲良く、とい

うか二人供最初から本気ではなかったのだろう。

「それにしても、二人供妙に仲良くないですか？ シードさん、なのはさんとフェイトさんには敬語なのに八神部隊長にだけタメ口ですし。」

と、スバルから最もな質問。ティアナやエリオ、キャラも気になるのかうんうん頷きながら耳を傾ける。

「その質問にはうちが答えたるわ。」

シードと話していたはやてが説明に入る。
因みにシードはというと、また食事に精を注いでいる。

「うちら四人は士官候補生の頃知り合ったんやけど、その頃はまだシードは敬語なんて使ってなかったんや。せやけど、私達三人はシードより幾つか階級が上になってしもて、私達はタメ口でもええ、言うつんのにどうしても敬語で話すねん。」

つまり、シードはなのはとフェイト、そしてはやてが自分より立場が上になったため、敬語を使うようになった、という事だろう。

「じゃあなんで八神部隊長だけ敬語無しなんですか？」

「お答えしましょう。ズバリ、敬語を使った時は無視してたからや！」

意外と簡単な対処法な上、どこかの髭眼鏡の研究者みたいな答え方だった。

すると、朝食を食べ終えたシードが体験談を語る。

「いきなり無視された時はビビったよ。なにせ理由がさっぱり分かってなかったし。」

「せやろ？この調子でなのはちゃんとフェイトちゃんにも、前と同じ様に喋ったらどうや？」

「いや、流石にそれは……………敬語で話すの慣れちゃったし……………」

「うん、そうしよう！」

「シード君もそっちの方が楽でしょ？」

「え、えええ……………」

フェイトとなのははノリノリだった。

「……………」

「？どないしたんや、四人供？」

FW陣の四人は、はやての言葉に耳も貸さずシードが積み上げた山の様な皿を見て、呆然としていた。

「ああ、これは初めて見る人は衝撃的やろね。」

「私達も初めて見たときは驚いちゃったもん。仕方ないよ。」

「しかも、これだけ食べておいて昔から一向に太らないんだよね、

シードって。」

はやての言葉に賛同するように答えるのはとフェイト。シード本人は、これで当然といった顔をしながらデザートのアレンジ豆腐を食べている。

すると、キャラが初めて見る光景に混乱したのか、エリオに無茶な提案をする。

「そ、そうだ！エリオ君もこれだけ食べれば、きつともっと強くなれるよ！」

「えええ！？こんなにお腹の中に入りきらないし、食べれたとしても強くはなれないよ！？」

「で、でもシードさんはきつといっぱい御飯を食べてるから二等空尉になるまで強くなれたんだよ、きつと！」

「そんな訳ないでしょ。ほら、スバルもエリオもキャラも、さつさと食べなさい。」

流石FW陣のセンターガードというべきか、三人を落ち着かせて速く食べようとさせる。

ただ、スバルだけは……

「わ、私も！これだけ食べたなら！少しは強くなるかな！？」

キャラの無茶な言葉を信じていた。

「えっと……速く食べないと、もうすぐ勤務時間来ちゃうよ？」

シードの言葉に皆が時計を見るや、勤務時間が近づいている事に気付き、全員が急ぎ食事を済ませる。

全員が食事を済ませるとフェイトとはやては本局に用事があるそうなので、フェイトの車で本局へと向かった。

なのはとFW陣、そしてシードはデスクワークの仕事に移る。

カタカタカタカタカタ

「ああゝ……デスクワーク、嫌だなあ……肩凝るし、足はつりそうになるし。嫌だなあゝ……………」

カタカタカタカタカタ

シードが愚痴を溢しながらも机に突っ伏して仕事をする様を、なのはを除く全員が注目していた。

「な、なのはさん……………これはほつといっても大丈夫なんですか？」

「うーん……………多分大丈夫だと思うけど……………」

ティアナの質問に、全く自信無さそうに答えるなのは。
スバルとティアナは気になったのか、シードの前にあるモニターを除きこむ。

「「ちゃ、ちゃんとやってある……………」」

どれだけ愚痴を溢そうとも、仕事だけはちゃんとやるタイプみたいだ。

「なのはさん、ちょっといいですか？」

シードは質問があるのか、椅子から立ち上がり、なのはのいる席へと行く。

「?どうしたの、シードk……………」

なのははシードに対応しようとし、突然何かを思い出した様に言葉を止め、モニターへ向き直り仕事を再開させる。

「えっと……………なのはさん？」

「……………」

「なのは……………さん？」

「……………」

何故かシードを無視し始める。

他の職員は首を傾げ、普段は優しいなのはが何故無視しているのか謎に思うだろうが、先程の食堂での会話を聞いた人はすぐに、なるほど、という顔をする。

「……………なのは……………(ボソッ)」

「ん？何、シード君？」

なのはの超絶スマイルでの受け答えに、シードは頭痛を感じた。
シードは、なのは本人にすら届きそうもない声量で名前を呼んだ筈なのに、なのはの地獄耳はそれを聞き取ったのだ。

「……はあああ……機動六課って、初日からこんなに大変だったんだ……」

未だに日が真上に来ていない時間帯から、シードは機動六課での仕事に不安を感じていた。

「シードも大変そうだねえ。」

「どちらかというと、身から出た錆って感じだけだね。」

「い、意味がよく分からないんだけど……」

スバルとティアナのダメ出しっぱい言い回しにシードは少しだが、頂垂れていた。

「えっと……なのは……さん？」

「……」

「……な……なのは……？」

「何？シード君？」

「っ！……」

シード絶句。

空いた口が塞がらないとはこの事か。

二人は気付いていないが、この場に居る職員全員が二人の関係を疑っていた。

カチャカチャカチャカチャ

.....

「あれ、皆食べないの？」

正午

一番のお昼時に、シード以外の人が呆然とシードの食べる予定である料理の山を見ていた。

大盛りのカルボナーラに、通常サイズより二周り程大きいハンバーグ、ポウルいぱいのサラダに、これまた大盛りのオムライス等々……

……

更に、デザートにはフルーツとアイスクリームを沢山使った特大パフェ。

FW陣はおろか、旧知の仲であるのはまでもが驚き、呆れていた。

「シード君、それだけ食べて体型変わらないなんて羨ましいなあ。」

何か秘訣でもあるの？」

「特に何をしてるって訳じゃないですけど………なのはさん達ってキツイ訓練してるんだから太らないと思いますよ？」

「……………」

なのは、笑顔のまま無反応。だが、眼が笑っていないことに全員気付いていた。

「な………なのは……………」

「何？シード君？」

「もうやだ……このやりとりさつきもしたし……………」

なのはは満面の笑み、シードは項垂れていて、FW陣は苦笑いしか出来なかった。

「訓練といえば、シードさんって午後からの訓練は参加するんですか？」

エリオが殊勝にも手を上げて質問をする。

「もちろん出るよ。はやてには明日からでも良いって言われてたけど、体鈍らせたくないし、なのは……………なのはの訓練もどんなのか気になるし。」

「訓練かぁ……………それなら今日は少し訓練内容を変えて、シュートイベーションでもやる？」

弾丸回避訓練。

なのはが提案したこの訓練は、厄介な自動追尾弾の対応を学ぶ訓練で、クリア条件は『制限時間まで逃げ切る』か、『操作している魔導師に一撃当てるか』の二つ。

「あ、でもシード君が入るとなると流石に厳しいかな……じゃあ、今日は予定通り連続で模擬戦でもやろっか」

「……え？」

流石のチームワークと言うべきか、FW陣の声が綺麗にそろつ。四人の唖然とした顔とは裏腹に、なのはは笑顔で食事を進めはじめた。普段から厳しい模擬戦を連続でやらなければならないため、明日は筋肉痛を覚悟した四人。

「でも勘違いしないでね？連続するのは、シード君だけだから」

「……え？」

「……ほっ」

次に食堂に響いたのは、シードの間の抜けた声と、FW陣の安心してきた声。

「ちょ、ちょっと待って！なんで僕だけ！？それに予定通りってどういう事！？」

「今日シード君が来ることははやてちゃんから教えられてたから、シード君に合わせて訓練メニューを少し弄ってみたんだ。」

「えっと……出来れば詳しい訓練内容を教えてくれない？」

既に諦めモードに入ったシード。せめて模擬戦前の訓練が少しでも楽である事を、心の中で祈っている。

「まずは準備運動で体を温める。次にシード君がどんな戦い方をするか皆に見せるためにシグナム副隊長と模擬戦、二回目はFW陣の私との模擬戦に付き合ってもらっ、っていう訓練メニューにしてみました。」

「で、でもシグナムさんがOKするかどうk……」

「その点については了承済みだ。久しいな、シード・ウェンハイム。」

「……………」

「どうした。何を呆けている？」

シードの座っている席の真後ろには、いつのまにか制限姿のシグナムが仁王立ちしていた。

「久々にお前との模擬戦だ。手だけは抜いてくれるなよ？」

「良かったね、シード君！」

シグナムとなのはは悪魔の様な笑みを、シードは悪魔に終われる子羊の様な哀愁漂う顔をしながら昼食をすませた。

NO.2 新しくも他愛ない日常（後書き）

という訳で、今回はシードとシグナム姐さんの模擬戦です！
前回より少し長めの文になりましたが、いかがでしょうか？
感想や誤字等があれば教えていただければ幸いです。

シグナム「ふふふ……… ウェンハイム、私を楽しませてみる！」

シード「シ、シグナムさん…… キャラ変わってませんか………？」

RE360「それでは次回、シードの行方をお楽しみに！」

シード「え！？それっていわゆる一つの死亡フラグじゃ？！」

NO.3 シード VS シグナム 前編

ミッドチルダ中央区画湾岸地区

機動六課の隊舎がある湾岸地区の訓練スペースには、仮想訓練場が稼働しておりビル街となっている。

そして幾つもあるビルの内の一つ、その屋上に青と白色の制服を着たのはと、訓練服姿のFW陣の四人、そしてたまたま時間が空いたという事でヴィータものは達とモニターを覗いていた。

「なのはさん、ちょっと質問したいんですけど。」

「何？スバル。」

「シードの魔導師ランクって幾つくらいなんですか？」

「確か……………総合で空戦AA+だったと思うよ？」

「AA+……………ですか…因みにシグナム副隊長はどれくらいあるんですか？」

「シグナム副隊長は空戦S-ランク。シード君とは1.5ランク差だね。」

「シグナム副隊長とはそんなに離れてないんですね……………でも、シードが一方的にやられそうな気が……………」

スバルを含め、FW陣全員がJS事件の際のシグナムの武勇を思い出し、シードが一方的にやられている状態を想像していた。

「そりゃ有り得ねえな。」

なのはとスバルとの会話にヴィータが割って入る。

「シグナムは自分から弱い奴と戦う趣味なんかねえからな。新人や部下の教導となりや別なんだろうけど。なのは、シードが受けた魔導師ランク測定の試験は、いつが最後だ？」

「詳しい時期は忘れちゃったけど、シード君が九歳の頃だから丁度九年前だね。」

つまりシードは、九年間試験を受けておらず、魔導師ランクも六年前のままという事だ。

「と、いうことだ。多分シグナムはランク云々じゃなく、シードそのものの強さを見極めてんじゃねえか？」

隊長格の人達にここまで言わせたシードへの認識改めたFW陣だった。

「この九年間でシード君はどこまで強くなったかな？」

なのはの笑みはモニターに映っている、既にセットアップを完了したシードへ向けられた。

仮想訓練場のフィールドの中、シードとシグナムが少し距離をとっ

て相対していた。

「……………はあ……………」

「そんなに私と戦うのが嫌か？」

「別に嫌って訳じゃないんですけど、まだ諦めて無いんだなあ、と思ひまして……………」

「当たり前だ。と言うか、九年前に挑発してきたのはお前のほうだっただろう？」

「まあ、若気の至りといった所ですかね……………そういえば、今の戦績ってどうなっていましたっけ？」

「私が一勝一敗四引き分けた。」

「あれ？僕いつ一勝しましたっけ？」

「最初の模擬戦の時だ。油断したつもりは無かったのだが……………なのに、二度目以降の模擬戦からは毎回引き分け……………そして、前回の模擬戦で私が一勝……………一体どういうつもりだ？」

「そ…それは……………」

シードは内心焦っていた。

確かにシグナムとの初戦はシードが勝っていた。

だが、初戦以降の模擬戦で引き分けが続いたのは別にシードが手加減した訳では無い。ましてや、シグナムが突然強くなった訳でも無い。

「（二人供、準備は良い？）」

シードとシグナムが延々と話続けている所に、なのはの念話が入る。なのはの問いは、実のところ二人の姿を見れば一目瞭然だ。

シグナムは普段の騎士甲冑、シードもバリアジャケットを着ている。シードのバリアジャケットは、ライトニングスタイルのエリオのバリアジャケットと似ており、インナーが黒色で、コートの丈が腰付近の長さということを除けば見た目はほとんど同じだ。

お互いの左手には鞘、右手にはお互い剣と刀型のアームデバイスを構えている。

シグナムは既にお馴染みのレヴァンティン、シードは白い日本刀型で剣腹には金の装飾がしてあるデバイスを自然体で持っている。

「ふふ、昔話に興じるというのも悪くは無いものだな。」

シグナムはレヴァンティンを構える。

「そうですね……アブソリュート、行くよ。」

『Yes, sir.』

そしてシードもデバイス、アブソリュートを鞘に納め、腰を沈めて構える。

その姿は、先程までゆったり話していた男性と同一人物とは思えない程の威圧感があった。

「（それでは、始め！！）」

なのはの声が聞こえた瞬間、

ダンッ！！！！

という音と共に二人が跳ぶ。

シグナムはレヴァンティンを斜めに降り下ろし、シードは抜刀術で相手を斬ろうとした結果

キイイイン！！

という衝突音と共に二人が切り結ぶ。

（抜刀術か……以前の模擬戦も初撃は抜刀術から始まっていたが、成る程。それで西洋剣ではなく刀という訳か。）

シグナムの読みは見事なまでに当たっている。抜刀術は刀で行う技で、刃の鞘走りによって剣速を早められるから、シードはデバイスを刀型にしたのだ。

シグナムはレヴァンティンでアブソリュートを押し返す。

シードは抵抗することなく、シグナムの力に任せて後ろへ跳び間合いをとる。

だが、シードに隙を与えまいとシグナムが間合いを詰める。

キイイイイン！！！！

シグナムの上段からの剣撃をなんとか防ぐシード。

そして、お互い幾度と斬り合う。

五合程剣を交えた時、決定打に欠けると考えた両者はほぼ同時に後ろへ跳び、互いの得物が届かない距離まで退く。

だがシードの刀は届かなくても、シグナムの剣は相手へ届かせる技

があり、シードがそれを思い出した時には既に遅かった。

「レヴァンティン!!」

『ロードカートリッジ。シュランゲフォーム。』

カートリッジが装填され、排莢が行われる。

「飛竜一閃!!!」

蛇の如くシードへ向かう連結刃は、砲撃級の威力を生み出しているため、非殺傷設定とはいえ直撃したらかなり痛そうだ。

(不味いな……………このままじゃ撃墜されて終了になっちゃう……………)

連結刃がシードに当たるまで、およそ一秒。なのはや、戦闘中のシグナムでさえ、このままシードが負けるとは微塵も思っておらず、シードの次の行動を予想していた。

だが、

「……………あ……………」

ドオオオオン!!!

呆気ない終わりだった。

シグナムの一撃によってシードは吹き飛び、ビルの壁に勢いよく叩き付けられ、気を失いかけ座り込む。

(こんなつもりじゃ……………なかったんだけど……………これで一勝二敗四引き分けか……………)

それだけ考えて、シードはそれ以上思考を働かせずに落ちていった。

NO・4 シード VS シゲナム 後編

痛い。

身体中が傷だらけで、立つこともままならない。

僕は今まで何をしていたのか？

物語るものは、今の自分の体の傷、跡形も無く崩れた廃ビル、そしてその瓦礫の頂点に立つ銀髪の青年だけ。

青年の方も、僕程ではないにしろ傷を負っていた。

だがやはり一番目を引くのは青年が担いでいる、血まみれの白銀の大剣だった。

「ふふふ、この歳でこの魔力量、戦闘センス、申し分無い！」

何を言ってるんだ？

青年はとても嬉しそうに叫んでいた。大剣はいつの間にか見当たらなくなっていた。

「さてと、初めましてだね。僕は君の噂を聞いて勧誘しに来たんだよ。ただ、突然攻撃してきたのには驚いたよ。怒りで見境が無かったんだろうね。」

青年がまるで独り言のように次々と話しかけてくるが、正直言っている意味が分からない。

まず勧誘という言葉。何に勧誘されるのか分からないが想像がつかないのなら考えていても仕方ない。

そして二つ目の疑問が、何故僕も彼も血まみれなのか。

彼の言った、怒りで見境が無かった、という言葉も気になる。

だが、段々意識が朦朧としてきてそこまで思考が回らなかった。

「おや？流石にやり過ぎたか……もし死んじやったら陛下になんて報告しよう………」

青年の憂鬱そうな顔を脳に刻んで、僕の意識は落ちていった。

「シード……貴様、どういっつもりだ？」

仮想訓練場の一角では、ビルにもたれ掛かりながら、気絶しているシードと、表情には出していないものの、怒り心頭といった感じで声を震わせるシグナム。

二人共バリアジャケットと騎士甲冑を装備し、手にはお互いのデバイスを持ったままだ。

「九年前はあんなにあっさりと避けたくせに、何故今回は避けなかった？」

返答は無い。気絶しているのだから当たり前だ。
にもかかわらず、シグナムは質問を繰り返す。

「そうか……そんなにやる気が出ないなら、私がヤル気を注入してやる。」

シグナムはレヴァンティンを握り直し、突きの構えをとり、レヴァンティンの剣先の先に、シードの頭をとらえる。

「（シグナムさん！もう模擬戦は終わりです！デバイスを下ろしてください！！）」

流石に模擬戦の継続は危ないと思ったのか、なのはが念話でシグナムを抑えようとする。

「邪魔をしてくれるな。シードは仮にもAAA+クラスの魔導師だ。それにも関わらず、この体たらく………せめて恥を晒さぬよう、一撃で頭を貫いてやる！！」

「（もうー！シグナムさん！！）」

シグナムの考えは一見、ネタに走っているのかとツツコミたくなるがシグナムの言うことも一理ある。

AA+ランクの魔導師ともなれば例え相手が格上であっても、戦術や相性によつては勝てる方法はあるし、ランクの差が0・5ではそこまで実力に溝は出来ない。

まして、シードの場合は魔導師ランクが九年前のままだ。心身共に成長したであろう現在では、実力的にシグナムを追い越していても不思議では無い。

「さて、シード……非殺傷設定といつてもこの距離で頭を狙えば、流石のお前でも怪我はするし、当たり所が悪ければ致命傷にもなりかねんぞ。」

言うやシグナムは、不敵な笑みを浮かべて狙いを定めていた。

「な、なのはさん、シグナム副隊長本気でやるつもりみたいなんですけど……」

ビルの屋上、スバルとエリオがシグナムを止めにくつもりらしく、スバルがセットアップしてウィングロードの準備をし、エリオがソニックムーヴの用意をしていた。

「四人共落ち着いて？シグナムさんの事だから、きつと何か考えがあるんだよ。」

「あたしも同感だ。シグナムはこんな事で人を殺すようなまねはしねえし、その相手が仲間だったら尚更有り得ねえ。何か考えがあると見て間違いないだろ。」

なのはをフォローするようにヴィータもFW陣を落ち着かせようとし、それに従って四人も後ろに下がる。

「で、でもシグナム副隊長かなり怒ってますか？ホントに不味いんじゃない……」

「やっぱり行こうエリオ！！シードだってまだ気絶したまま……」

「落ち着きなさいスバル！エリオも！なのはさんの言う通り、シグナム副隊長も必ず何か考えがあつて動いてるはず。だったら、私達がどうこうする事じゃないでしょ？」

FW陣の司令塔であるティアナの言葉に反論出来ない二人は、再び後ろへ下がる。

「……………」

「……………？なに考え事してんだ、なのは？」

「ああ、ごめんね、ヴィータちゃん。あくまで予想だけでもしかしてシード君……………」

ズガアアアン！！！！

突然の轟音に全員が音の出所へ向く。

音の出所は、先程までシードとシグナムが居たビルの壁面付近。そこには、土煙が立ち込めており、唯一存在が確認出来るのは、デバイスを前に突きだしひび割れていたビルの壁面を、突き崩したシグナムだけ。

少し経つと土煙も晴れてきて、先程までシードが座っていた場所には誰も居ない事がはつきりと見てとれる。

「…………え？シードが、居ない……………」

「一体どうしたこと！？」

「シードさんは気絶してた筈じゃ……………！？」

「それとも…………シグナム副隊長に……………」

FW陣がビルの屋上から身をのりだし、シードの安否を心配している中、なのはとヴィータだけは呆れ顔だった。

「さつきまで、なのはが考えてた事ってもしかしてこれの事か？」

「うん……………多分シード君は間一髪、シグナムさんの技を防御してたと思うの。ただ、勢いが強くてビルの壁に叩きつけられただけ……………そして、恐らくシード君はちゃっかり避けて、今も別の所から見てるはず……………」

「まあそんなところかな？流石に頭を貫かれるのは嫌だからね。」

「はああ……………シグナムさん、絶対怒るよ……………え？」

「……………えええええ！！？……………」

なのはの声を合図に全員が後ろを振り向く。

そこに居たのは、どこからどう見ても怪我人とは思えない程ピンピンしているシードその人だった。

だが、なのはの言う通りビルの壁面に叩きつけられた際に口の中を切ったのか、口から少し血が垂れていた。

「で、でもシードさんはどうやってここまで来たんですか？」

「ん？キャラ口だって知ってる筈だけど……………フェイトさんや、昨日の模擬戦でエリオだって使ってた移動魔法だよ。」

「もしかして、その魔法ってソニックムーヴの事ですか？」

シードは肯定するように頷く。

シードは当然という顔をしているが、同じ魔法を使うエリオは有り得ないものを見る眼をシードに向けていた。

正確にはエリオだけでなくFW陣の四人が、だが。

この場に居る、シードを除く全員がシードがレヴァンティンに刺される所を見ている。刺された筈なのに、今この場に居る。

考えられるとしたら、刺されたように見えるシードは、ソニックムーヴで出来た残像。

だが、それだけのスピードを出すにはフェイト並の魔導師でないとまず出来ない。

「シイドオオオオ!!どこに行ったあ!!?」

「うわっ、ヤバっ!シグナムさんめちゃくちやキレてる!!」

「さっさと出てったほうが身のためだぜ?下手したら本気で切られるんじゃないか?」

「やめてよヴィータ、そんなわけ……………あるよねえ、やつぱ……………はあ……………」

シードとヴィータが会話を続けている間も、下ではシグナムが大声を張り上げている。

心なしか、その顔は少しばかり晴れやかに見えた。

「さてと……………それじゃあ、ちょっとシグナムさんに怒られに行こうかな。」

「ふふっ、行つてらっしゃい、シード君。」

シードとなのはやりとりがまるで新婚の若夫婦に見える、そう思ったヴィータとFW陣は、この場にユーノが居たらどんな顔をするのか、そんなことを想像して五人は微笑を浮かべていた。

再びシグナムの元に向かったシードは、またしても向かい合い、シグナムは既にやる気全開といった状態でシードを睨み付けている。

「…………シード・ウエンハイム。」

「は、はい？何でしょうか……………？」

「何故最初から全力を出さなかった？」

「えっと……………それは、その……………」

「もういい。これ以上貴様が恥をかかぬよう、私が引導を渡してやる。」

シグナムがレヴァンティンを構え、手に力を込める。

「ええっ！？…………で、でもこれは模擬戦ですからお互いの攻撃は全て非殺傷設定ですよ？」

「ならば、いつそ死んだ方が良かった、と思えるくらい痛めつけてやる。覚悟しろ！」

シグナムが喋り終わると同時に、レヴァンティンが排莢を行う。
そして、レヴァンティンが剣から連結刃へとその形を変える。

「飛竜一閃！！！」

またしても連結刃から繰り出される砲撃級の魔力与付斬撃は、真っ直ぐにシードへ向かう。

シグナムはシードを試していた。彼が本気で自分と対峙する気があるのか確かめるため。

もし本気ならば、九年前と同じようにあっさり避けてくる筈。

シードも先程と同じように、刀を納刀して抜刀術の構えをとる。

魔力を纏った刃は、迷うことなくシードに向かい、後一秒と少しでシードに直撃するほど早い。

だが、シードに直撃するまでおよそ二メートルといった所で、シードの輪郭が一瞬ぶれた。

ドオオオオオン！！！！

今度こそ直撃した、そう思ったFW陣は先程シードの輪郭がぶれたことに気づいていないだろう。

そのことに気づいていたなのはとヴィータは、一秒たりとも目を離せないといった心持ちでフィールドを凝視し、シグナムもそのことには気づいていたためすぐに左手で鞘を逆手に持つと、

ガキイイーン！！

シグナムの斜め前に突如表れたシードの抜刀術を間一髪防ぐ。

シグナムはシードの斬撃を防いでる間にレヴァンティンを剣の状態へ戻していくが、シードは相手の隙をみすみす逃す程優しくはない。

またしてもシードの姿がぶれたかと思えば、次はシグナムの背後に一瞬で回り込む。

シードの高速移動魔法に何とか対応し、また左手の鞘でシードの上段からの斬撃を防ぐ。

シグナムからしてみれば、ただ防いでるだけでは、防いだ次の瞬間にはまた別の方角から攻めてくるため、防ぐ以外の対処法をとるか、防いだ後すぐに行動を起こすしかない。

またシグナムの背後に回り込み、抜刀術を繰り出すシード。

その一撃を鞘で防ぐと、シグナムは意を決して上空へ飛び、レヴァンティンを剣へ変形させる。

(……………不自然だ。ウェンハイムの初撃のスピードを考えれば、私は既に背中から斬られていてもおかしくはない。仮に、これがあ

いつの全力のスピードだとしても少し考えればもつと効率的な攻め方があるはず……………）」

確かにシードの初撃の速度は、二撃目、三撃目を凌ぐ速さだった。だが、これが畏だとしたら？

という考えに至るのに、普段から戦闘訓練をしているシグナム達ではそう時間はかからないはずだ。

シードの速さをもつてすれば四方八方攻め放題の筈。

ならばシグナムが上空へ回避するのは必然といってもいい。

だが、それ自体が畏だとしたら……………

シグナムがその事に気付いて、シードの姿を確認しようと地面に目を向けるが、そこにはシードは既に居らず、シグナムは反射的に真上を見る。

そこには、アブソリュートを右手で振りかぶり、シグナムに当たるはずの日光を遮っているシードの姿。

「じゃ、シグナムさん。お疲れ様でした〜！」

ガッ……！

という鈍い音とともにシードの一撃がシグナムに入り、シグナムはそのまま地面に叩きつけられた。

「（そこまで……！）」

なのはの念話を聞き取り、地上に降りたシードと、ダメージをくらないながらも何とか立ち上がったシグナムがバリアジャケットを解除する。

「（まあ、色々あったけどとりあえず、シード君対シグナムさん、第七回目の模擬戦はシード君の勝利！戦績はシード君が二勝、シグナムさんが一勝、引き分けが四回ね。）」

「シグナムさん、お疲れ様でした。」

「ああ。私も遂に追い越されてしまったか。」

顔に微笑を浮かべながら、シードと握手しているシグナムはどこか清々しげに見えた。

「そんなことないですよ。聞きましたけど、J・S事件の際にシグナムさんと息ピッタリの融合騎を見つけたんでしたよね？なら、僕はユニゾンした状態のシグナムさんを倒さないと、シグナムさんを越えたことにはならないと思うんです。」

「アギトの事か。確かに私の変換資質が炎だった事もあったか、相性がとても良いらしい。だが、私は今の状態でお前を倒したいと思っている。」

シードの殊勝な考えを、シグナムは遠回しに否定する。

そこには、シグナムの『自力で好敵手を倒す』という意地があつた。

「（シード君？二人で反省会も良いけど、まだもう一戦残ってるよ？）」

「まだ……やらなきゃいけませんか………？」

「（ダ・メ♪）」

シードが哀愁をたつぷり漂わせて言った提案は、なのはの満面の笑みの前に悉く破れ去った。

NO・4 シード VS シグナム 後編（後書き）

久々の戦闘シーンどうでしたか？

個人的にはシグナムとシードの戦闘戦闘シーンを読み返してみると、手抜きみたいに思えてきました（・ゝ・ゝ）

次回はなのはさんVSFW陣+αでやってみようかな、と思っています。

シード「いやあゝシグナムさんとの戦闘めちやくちやつかったあ
……………」

RE360「お前、やつと少し主人公っぽいことしたと思いきや突然愚痴を溢すとは…………… 自覚なしかねちみは？」

シード「そのキャラなに！？何か地味に嫌悪感を覚えるんだけど（・
・ゝ）」

RE360「ええい！だまらっしゃい！！あんまり変なことばっか
言っつとなのはさんにボコらせるぞ！？」

なのは「そうだね……………少し、頭冷やそうか。」

RE360「やつちやつてくだせえ！！なのは様！！」

なのは「シード君じゃなくてあなたのほうだよ……………」

RE360「え？……………ギヤアアア！！！！」

作者がSLBをくらったことにより、今回で最終回とさせていただきます(嘘)。ご愛読ありがとうございました！

NO・5　なのはさんの完璧　魔法教室！

「シードSide」

えっと、どうも？シードです。

さっきまでシグナムさんと模擬戦をしていたんですが、次はなのはと模擬戦という悪魔としか言いようがない訓練メニューで、ホントやる気が全く出ません。

さて、今僕とFW陣の四人は、バリアジャケットを展開しフィールドに立って空中に浮かんでいるのはと対峙している状態です。

「さて、五人とも準備は良い？」

五人「はい！！！」

元気の良い返事と同時に、僕ら五人は陣営を組む。

陣営と言ってもそんな大層なものじゃなく、それぞれ自分に合った立ち位置に居るだけなのだが。

スバルはFAだから一番前に、CGのティアナはスバルの後ろで全員を見渡している。WGのエリオと僕はティアナの左右で武器を構えているし、キャロはFBとして皆をサポートするためティアナの後ろで控えている。

「スバル、エリオ、シード、私が合図するまで頼むわよ！」

「了解！！！！」

「キャラは三人のサポートお願いね！」

「はいっ！」

「話も丁度まとまったみたいだし、そろそろ始めようか！」

五人「はいっ！！！！」

そして、管理局のエースオブエースとの戦いが始まった。

「Side out」

模擬戦開始と同時にスバルが動く。

「ウインググロッドッ！！」

スバルの足下に青い正三角形のベルカ式魔方阵が展開され、スバルが地面に右拳を当てると魔方阵と同じ青い道が空中に作られる。

そしてウインググロッドの展開と同時にシードはティアナの右側に、

エリオは左側に跳ねると、二人はビルの壁を使ってもう一度跳ねて左右からなのはに攻め、スバルが正面から攻める。

『オーバルプロテクション。』

レイジングハートの機械音声と同時に桃色の防御魔法がなのはを包む。

ガガガンッ！！！！

エリオのストラダーで突き、スバルのリボルバーナックルで殴り、シードのアブソリュートで斬りかかった結果、三つの衝突音が響く。

「ちょっとちょっと！これじゃ今朝の作戦と変わらないんじゃない！？ちゃんと作戦考えてるの！？」

なのはの説教を受け流しながら、スバルはウイングロードを後退し、エリオとシードはビルの壁にある足場に着地する。

「キャロツ！！」

「うん！」

エリオの呼び掛けに元気に返事をしたキャロは、魔法の詠唱を始め

る。

キャラのキャラの補助魔法により、ストラダにフィールド貫通能力が与付された魔力刃が展開される。

「ストラーダ!! カートリッジロード!」

ロードカートリッジ。

ストラダに二発のカートリッジが装填され、薬莖が地面へと落ちていく。

エリオがストラーダを構えると、ブースターの噴射口から、魔力をロケットの様に噴射させると、なのはへと一直線に飛んでいく。

「いつけえええええええ！！！」

先程のキャロのツインブーストの効果もあって、スピードも上がっている。

だが、エリオの突撃だけでなのはクリティカルヒットを狙えるとは、ここにいる誰もが思ってもいない。

「どれだけ早くても、仲間の援護も無しに突撃してくるなんて自殺行為だよ！」

言葉の意味を体に分からせるため、レイジングハートをエリオの方に向け、環状魔方阵を幾つか出現させて、砲撃の準備をする。

「デイベイン……………」

「させるかっ!!」

ガキイン!!

先のシグナムとシードの模擬戦でシードが行った高速移動魔法を使い、一瞬でなのはの後ろに回り込んで上段から斬撃を加えようとするも、砲撃を諦めたなのはが左手で防御魔法を展開してガードする。

だが、シードの攻撃が先程なのはの言った仲間の援護で、シードの速さを活かした強襲はエリオに放たれる筈の砲撃を中止させ、小さな隙を作る。

しかし、なのはは何か思い付いたのか向かってくるエリオに対しては防御魔法を展開しなかった。

エリオが段々近づいてきて、残り二秒程でなのはにエリオの一撃が決まるという距離まで近づいてくると、なのははシードの刺突を受け流しつつエリオの攻撃を避ける。

エリオの突撃攻撃は、現状では直線にしか移動出来ず、ストラーダをフォルムツヴァイに変形させ噴射口を増やすことでその問題点は解消された。

だが、今は後方二機にしか噴射口が付いていないため、前述の通り真っ直ぐにしか突撃出来ない。

なのはがエリオの突撃を回避した今、その直線上にいるのは刺突を受け流されよろめいているシードだった。

「ウワアアア!!?」

「え、エリオ!? ちょ……ま……!!」

ただ、流石にそのまま直撃何て事はしない。

シードはギリギリの所で槍の一撃を避けると、空いていた左手でストラーダの柄を掴むとストラーダの勢いを利用して一回転し、ストラーダの突進方向をなのはの方へと向け突進させる。

「エリオ、ごめん!!」

「シ、シードさ……うわあああ!!」

「えええええ!!?!?」

突然ストラーダの向きを変えられ、驚きのあまり悲鳴をあげながらなのはに突撃していくエリオ。

流石のなのはも驚いたのか、つい大声をあげてしまう。まあ、エリオを含むFW陣の全員が驚いていたのだが。

予想すら出来ない奇襲とはいえ、最初の突撃を避ける際にそれなりの距離をとっていたので余裕が出来たのか、ストラーダが直撃する

直前にプロテクションと思われる防御魔法を展開する。

ガギイイイン！！！！

ギリギリで間に合った防御魔法は、ストラーダの魔力刃の先端が少し突き刺さった程度の被害で収まった。

だが、エリオはそのままプロテクションを貫通させようと、噴射口からさらに強く魔力を出すため、なのははまだ気が抜けずにいた。

「（三人とも、もう少しだから踏ん張って！）」

ティアナの念話が届くと、スバルがやる気を出したのかももう一度ウイングロードを作り、クラウチングスタートの体勢で走る準備をしていた。

「行きます、なのはさん！！」

「スバルやる気満々だね。私もやられないようにしなくちゃ、ねっ！！」

なのはは、粘ってプロテクションを貫通させようとしていたエリオを弾き飛ばす。

エリオは空中で一回転して体勢を立て直し、地上に着地する。シードもスバルとエリオの元へ着く。

「エリオ、スバル、もう一踏ん張りだから頑張ろう！！」

「はいっ!!」

「うんっ!!」

F W 陣の中で最も年長だけあって、前衛で攻め立てていても仲間への気遣いはしっかりはあった。

「（準備出来たわ！四人とも、例の作戦やるわよ!!）」

「（了解っ!!）」

最初に動いたのは、今回三度目のウイングロードを作り、ウイングロードを進んでなのはへ突撃するスバル。
ウイングロードの形は、スバル達から見て右側に大きく湾曲してなのはの元へ繋がっている。

二番目に動いたのはエリオ。

こちらはビルの壁面をまたしても利用し、なのはの元まで跳ぶ。

「ストライクドライバー!!!」

ガキキーン!!!

スバルの拳打と、雷を纏ったエリオの魔力刃による斬撃がなのはの

全方位防御魔法に衝突する。

防御魔法を全方位にしたのは、恐らくシードの高速移動魔法によって後ろに回り込まれても対処出来るようにするためだろう。

そして、最後に行動を起こすシード。

納刀されていたアブソリユートを抜刀し、突きの構えをとる。

シードの鋭い視線の先には、左右から攻撃を受けているなのはの真正面。

「聖剣流……………第四式……………」

誰にも聞こえないよう呟くと、最早定番となったシードの移動魔法によって姿が消える。

そして、次に現れたらのは少しひび割れた防御魔法でスバルとエリオの攻撃を防いでいるなのはの正面。

「崩点牙っ！」

パキイイイン

あまりにも静かな刺突だったため、さほど威力が無いように見えるが、なのはの張っていた防御魔法はシードの刺突で完璧に崩れた。攻撃自体は避けられたものの、なのはの防御魔法を崩したのは相当効果が大きく、一瞬だがなのはに大きな隙が出来る。

そして、その隙を逃す程FW陣の司令塔殿は甘くなかった。

少し時は遡って、スバルとエリオのコンビネーションアタックが炸裂していた時、それなりなのは達から離れたビルの上で、ティアナはターゲットリングを遠く離れたのはへ向けていた。

（よし！もう一押しでなのはさんの防御を破れる！頼んだわよ、シード！！）

そして、ティアナの思惑通りなのはのプロテクションはシードの一突きで破れ、一瞬の隙が出来る。

「今だ！！ファントムブレイザー！！！！」

ティアナが出現させたターゲットリングから、オレンジ色の砲撃が射出される。

なのはやフェイト達の砲撃に比べると大きさは見劣りするが、遠距離狙撃砲であるこの魔法は正確さと射撃距離が大切だ。

だが、その点に関しては心配しなくても良さそうだ。

バチイイイン！！！！

「……………え？」

ティアナが呆けた声を出した理由、それはティアナの砲撃がなのはの防御魔法で簡単に防がれたからだ。

何故なのはティアナの居場所が分かり、砲撃を撃つ事が分かったのか。

それは……………

「ふう……………危なかったあ。ワイドエリアサーチWAS使ってなかったら私撃たれてたかもね。」

「っ!？」

ティアナは何かに気付いたのか、突然後ろに振り返る。

そこにあったのは、一つの桃色のサーチャーだった。

なのはティアナが何か仕掛けてくるのを見越して、ティアナが見当たらなくなった時からサーチャーを展開させてティアナを探していたのだ。

「でも流石にヤバかったよ。戦闘中もサーチャーの事を意識してなきゃいけないからね。」

つまり、シード達は手加減されながら戦闘していたも同然。

足場を無くし、地上に着地したスバルとエリオは口を開けながら果然と空中にいるのはを眺め、同じく地上に下りたシードは半分呆れ、半分納得といった複雑な表情をしていた。

「ところでシード君……… 何で飛ばなかったの？シード君は空戦魔導師何だから、空に飛んでた方が戦いやすかったんじゃないの？」

そう。本来シードは空戦魔導師であり、その本領は空中戦で発揮される。

それが何故飛行魔法を使わなかったのか。

その理由は恐ろしく単純かつ納得のできるものだった。

「だって、FW陣って基本的空中戦しないでしょ？それなのに空戦魔導師と組む事なんて殆ど無いだろうから、それなら僕も合わせて飛行魔法使わないほうが良いかな、と思つて。」

「もう……… だからって、自分の出せる実力を最大限まで出さないのは、自分は強いって思い上がってる証拠にだってなるんだよ？模擬戦とかでも、相手の人を舐めてるとしか思われなからだからね！？」

「うつ！……… こ、今後は善処します……… 」

ああ、シード（さん）は結婚したら必ず尻に敷かれるタイプだ。

と、ナイスなコンビネーションで同時に同じ結論に至ったFW陣だった。

「オオイ！！おめえら何やってんだあ！！？」

突然の大声に全員同時に声のする方を向き、全員同時にヴィータが

観戦していたことを思い出す。

「まだ模擬戦中のくせに何まったり話し込んでんだあ！！！」

全員「……………」

全員、忘れていた。

瞬間、シードがなのはの後ろに回り込み、それに反応したFW陣も、なのはを取り囲む。

「はあ……………凡ミスしちゃったなあ……………これじゃ示がつかないや……………さて、どうやって切り抜けようかな？」

なのはのあまりにも素早い切り替えの早さに、五人に緊張が走る。

そして、五人が同時になのはへ襲いかかろうとしたがシードを除く全員が、転んだ。

別に何かにつまづいた訳ではない。

原因は四人を拘束する桃色のフープバインド。これにより、バランスを崩して倒れてしまったという訳だ。

因みに、シードはギリギリバインドを避けてました。

「このバインドはね、近距離でなら相手に気付かれることなく相手を拘束することが出来るの。スバルは一度だけやられた事あったよ

ね？」

スバルの脳裏にて思い出された光景は、自分とティアナの二人でなのはとの模擬戦をし、ティアナがなのはにフルボッコされていたシーンだった。

ティアナも同じ事を思い出したのか、青ざめた顔で微妙に震えていた。

「さて、残るはシード君だけ。シード君とは久し振り！ on 1だね。」

嬉々として語るのには対し、シードは少し腰が引けていた。

「じゃあ行くよ、なのは！」

「良いよ！来て、シード君！！」

二人が何時になく真剣な表情で相対する。

ダンッ！！

先に動いたのは、やはりシードだった。

お得意の高速移動と抜刀術を掛け合わせて、威力を高めようとしている。

簡単に言えば、某縮地の瀬田と似た感じだ。

対してなのは、レイジングハートの先をシードに向ける。この動作だけで、使う魔法は限られてくる。

後一步、後一步踏み込んで刀を抜刀させればそれでシードの勝ちだった。

だが、その瞬間レイジングハートから放たれるピンクの砲撃をシードは見逃さなかった。

ドオオン!!!

なのはのチャージング無しの砲撃魔法、ショットバスターを間一髪右に逸れて避けるシード。

だが、避けている間も高速移動は続いており、瞬発的とはいえ滅茶苦茶な速度のまま突然体の重心を動かしたのだ。

ガッ!!!ズシャアアア!!!

転ぶのも当たり前だ。

明確に言うと、シードなのはの砲撃をギリギリ回避する所までは良かったのだが、勢いのままに足をもつれさせてしまい、顔を強く打しつつスライディングの様になのはの後方まで滑って、止まっただと思いきや今度は動かなくなった。

「……………えっと……………と、取り敢えず模擬戦は終了。FWチーム及びシード君は捕縛、げ、撃墜?……………ということ、本日模擬戦は終わります……………」

ここまで不完全燃焼という言葉の意味を味わった事が無いであろうFW陣やなのはは、何処か呆けた表情をしながらシードが起きるのを待っていた。

「シードside」

誰かが僕の側で喋っている。

意識は朦朧として、それが誰なのかはつきりせず、しばし頭を巡らせる。

そして、頭に浮かんだのはとある少女。

「あつ！シード君気が付いたんだ！？」

「じゅ、ジュンナっ！……………のは？」

目の前にいたのは、先程頭に浮かんだ幼馴染みの少女では無く、青と白を基調とした制服を来ているのはだった。

「じゅん……………なのは？」

どうやらなのはは混乱しているらしく、頭から？マークを出していた。

そして、やっとシードが自分の名前と、ジュンナという女性の名前を呼んだのだと理解した。

「えっと……………なのは？あの模擬戦からどれだけ経った？」

「まだ十分程。FW陣の四人は、汗で体冷やすといけないから先に隊舎に戻ってもらったんだ。」

「そっか……………」

流石に有り得ないだろうけど、なのはが起こしてくれなかったら僕風邪ひいてたな。

「ところでシード君。私も質問があるんだけど？」

「うん？何？」

「あのね？ジュンナって誰？」

……………

一瞬、誤魔化そうとした。

だが、それは敵わないということを僕は分かっていた。

何故なら、今僕がいるこの状況はまさしく、蛇に睨まれた蛙だからだ。

僕のすぐ側に座り込んだのはの眼は僕の視線を捉えて離さず、正直少し恐かった。

「えっと……………僕の出身世界の幼馴染み……………かな？小さい頃、よく一緒に遊んだんだ。」

「へえー幼馴染み……………なんだ？そのジュンナって娘と。」

「う、うん……………」

そして、今度こそ頭に浮かぶのはあの娘のこと。

花畑で遊んだ日々。花をプレゼントされたあの日。何もかも、昨日の事のように鮮明に覚えている。

そして、あの娘を守れなかった、あの日の事も……………

「シード君？そろそろ隊舎に戻ろう？体調管理も大切な仕事だからね。」

なのはの言葉に、意識が現実へと引き戻される。

空を仰ぎ見ると、既に夕焼けが眩しい時間帯になっており、段々と風が寒く感じてきた。

「ね？一緒に帰る？」

立ち上がって、僕に笑顔で手を差しのべてくるのは。
そして、彼女の手 zu 自分の手を重ねて立ち上がる。

そして僕らは、夕陽の光りを背中いっぱいを受けて、楽しくお喋りしながら隊舎へと帰った。

NO・5　なのはさんの完璧　魔法教室！（後書き）

ね、ねもい……………

只今深夜三時半でござえます。

なのは「体調管理も大切な仕事（ry）」

という訳で、今回はなのはさんvsFW陣+αでした。

しかもちよつとした今後への伏線つばいやつやなのはさんの好感度
上げつばいのをやってみました！

自分で作ったオリキャラながら殺意がデロデロ沸いてきた……………

↓隊舎に帰る途中↓

なのは「ねえシード君。手、繋がない？」

シード「え！？な、何で？」

なのは「別に？何となく……………かな？」

シード「そ、そうなんだ……………」

なのは「う、うん……………」

シード「……………」

なのは「／／／………」

RE360「リア充爆発しやがれっ！！！」

はやて「ええやないか……彼女居ない歴〓年齢やからって、シードの事僻んだらあかんで？」

RE360「何で知ってんの?!?!?」

NO・6 隊長と元先輩と知り合いと（前書き）

やっと書き終わった！

長らくお待たせして申し訳ありません！
今回は今までより若干長いので御了承下さい！

シード「テンション高いなあ……」

NO・6 隊長と元先輩と知り合いと

一週間後。

機動六課の隊舎の前に、管理局の制服を着た一人の長身の男が立っていた。

二十代半ばの外見、燃える様な赤毛。

そして、航空武装隊の所属である証のエンブレム。

「さてと……うちの秘蔵っ子はどうしてることやら………」

ポツリと呟くと、欠伸をしながら隊舎へと入っていった。

「ティアナ！もっと全体をよく見て！！スバルも、フロントアタッカーが簡単に押し負けたりしない！！」

「はいっ！！」

陸戦用シミュレータの中でも既にお馴染みであるビル街にて、スターズのメンバーが実戦訓練をしていた。

「（スバル、クロスシフトB、やるわよ!）」

「（了解!-!）」

念話でのやりとりの後、ティアナは眼を閉じて意識を集中させる。

ティアナの足下にミッド式の魔方陣が展開されると、空中に五、六個の魔力弾が形成される。

（もつと……なのはさんを攪乱させるには、これだけじゃ………）

ティアナの推測は正しく、なのはは既に十を超える誘導制御型の魔力弾を漂わせていた。

（もつと……増やさないと!）

ティアナはクロスミラージュのカートリッジを一発装填し、魔力弾の数を一気に十五個まで増やす。

「（スバル、準備は?）」

「（いつでもオーケーだよ!）」

二人はお互いの顔を見て、頷く。

「ウイングロード!!」

スバルの足下に展開されたベルカ式の魔方陣から、水色の道が出来ていく。
真っ直ぐ作られたウイングロードの先には、空中に漂うのはが居た。

「うおおおお!!!!」

叫びと共に、スバルは空中に出来た道を全速力で進む。
だが、

「攻撃が単調過ぎだよ!!そんなに打ち落とされたいの!?!」

なのはがスバルの接近をそう簡単に許すはずもなく、空中に漂う魔力弾が一斉にスバルへと飛来する。

「させませんっ!!」

だが、この展開を読んでいたティアナも一斉に魔力弾を発射させる。

ドドドオオン！！！！

複数の爆発音が響き、その中心部をスバルと、生き残ったティアナの魔力弾が駆け抜ける。

若干魔力弾の方が早く、スバルを追い越してなのはへと飛来する。

なのはは咄嗟にラウンドシールドを展開させ、魔力弾の衝突を防ぐとする。

だが、魔力弾がシールドに衝突する寸前に軌道を変更し、なのはの後ろへ回り込む。

そして、スバルもなのはの直ぐ側まで迫ってきていた。

今なのははスバルとティアナの魔力弾に挟まれている状態にある。
この状態では必ずどちらかの攻撃は避けきれない、とティアナは実践のだろう。

「リボルバーキャノン！！」

ガキイン！！

先程張っていたなのはのシールドに、スバルのリボルバーナックルが衝突する。

だが、その瞬間なのはの後方に浮いていた魔力弾がなのはへと直進

する。

「ヤバッ……………」

ドオオオオン！！

轟音と共に発生した爆風によって、なのはの姿は見えなくなった。

一方ライトニング分隊とシードは、同じく陸戦用シミュレータで作られた森の中で回避トレーニングを行っていた。

ドンドンドンッ！

幾つもの魔力スフィアから放たれる射撃をひょいひょい避けていくエリオとキャロ。

モニターで弾速を調整していくフェイト。
暇を潰すようにただ訓練を眺めるシード。

「って、ちょっと待ってシード。シードは何してるの？」

「何って……訓練を眺めてるんだけど？」

「はぁ……暇そうだね。個人訓練でもしてれば？エリオ、キャラ、そろそろ休憩しよ？」

「何か……刺々しいなあ………」

「別にそんなことないけど？エリオ、キャラ、はいこれ。」

「「ありがとうございます！」」

フェイトはシードの言葉を無視しつつ、スフィアの射撃を止めると、汗だくのエリオとキャラにドリンクを手渡した。

「ねえ、これってそんなにキツいの？」

シードが、先程まで射撃を行っていたスフィアを指差しながらエリオに聞く。

「結構大変ですよ。最初の内は楽なんですけど、弾速が上がってくると避けるのも一苦労で………」

「へえ……ねえフェイト、僕もやらせてもらっても良いかな？」

「良いけど……難易度は？」

「ん……あんまり自信ないから、最低難易度と最高難易度の中間でお願い。」

「分かった。」

そう言ってフェイトはモニターでスフィアの調整を、シードは軽いストレッチをしていた。

しかし、エリオとキャラは見てしまった。
フェイトが操作しているモニターに映し出された『弾速：MAX』
という表記を。

「あ、あのお……フェイトさん？それって……？」

「うん？なあに？キャラ。」

「な、何でもないです！！スミマセン！！」

キャラが問いを投げ掛けようとした瞬間、フェイトは今まで見たことも無い様な笑顔で遮り、キャラは底知れぬ恐怖を感じた。
エリオも右に同じ。

「フフフ……これでシードも………」

「……………」

エリオとキャラは絶句しつつ、即座に自分達の考えが甘い事を悟った。

土煙で細かくは見てとれないが、秒速数十発単位で放たれる魔力弾の雨は、現在進行形でシードへ向けられている。

いくら試験用のスフィアといえど、ここまで激しい攻撃が全弾命中すればただではすまないだろう。

だが、エリオとキャラが呆けている中、フェイトは確信していた。

（…………間違いない。シードはこれ全部避けてるんだ……………！）

普通なら信じがたい事だが、スフィアから射出される魔力弾は一部の場所だけではなく、あらゆる方向へ打ち出されている。

このスフィアは特定の相手が一定範囲内に居る場合、その特定の相手に向かって打ち出される。

だが、射撃方向が転々と変えられている所を見ると、シードは全ての魔力弾を避けているのだろう、とフェイトは考えていた。

「……………つて、フェイトさん！！このままじゃシードさん死んじゃいますよ！？」

「は、早く魔力スフィアを止めないと！！」

ここで漸く我にかえったエリオとキャラは、魔力スフィアを止めるようフェイトに訴える。

「二人共落ち着いて。シードはまだ避けてる。」

「……………え？」

ドドドドドドンッ……！

フェイトが二人に説明をしようとした時、スフィアから魔力弾が射出されなくなった。

土煙が晴れると、地面には魔力弾によって出来た小規模だが大量のクレーターに、シードの移動魔法によって作られたと思われる地面を削った跡。

その跡を目で辿っていくと、

「……………（ピクピク）」

スフィアの射撃範囲から出たは良いものの、勢い余って木に衝突したらしく、幹が微かにへこんだ木の根元で、頭から血を流しながら仰向けになって倒れていたシードの姿があった。

「はあ……………どうしてこんな事に……………」

「ごめんね、シード。少しやり過ぎたみたい……………」

「まあ、最終的にミスしたのは僕だから構わないけど、どうして設定を変えたの？」

現在シードの応急処置を兼ねて休憩中。

シードは幸い木にぶつけた部分が頭ではなく額だったため、大して大事にはならなかった。

エリオとキャラも一安心したらしく、今は二人の側で座りながら雑談中。

そして、魔カスフィアの弾速を変更した事について、フェイトに問いただしていた。

「そ、その……………先週の模擬戦の後から……………ずっとなのは……………その……………」

（省略）

「つまり、先週行った模擬戦以降僕となのはがやけに親しくしていて、それで疎外感や嫉妬等の感情からこんな事をしたの？」

「べ、別に嫉妬したなんて言っていないよ！ただ、ちょっと仲間ハズレにされた気がして……………それで……………ちょっとした悪戯気分で…ホン

トにゴメン……………」

恥ずかしさで頬を紅潮させながら謝るフェイト。
シードの方は、特に怒っているようには見えないが、流石に笑い事でもないので苦笑気味だった。

「そっか……………何かこのままフェイトにやられっぱなしっていつのも何か癪だなあ。」

「ホントごめん……私に出来る事なら何でもするから許して!」

フェイトはパンツと両手を合わせて拝むようにシードに許しを乞う。

「じゃあ、今度何か奢ってよ。出来れば美味しい食べ物。」

「……………え?そんなのでいいの?」

「うん。」

呆れた顔で聞き返すフェイトに、シードが笑顔で頷く。

「じゃあ、今度の休暇にでも美味しいお店連れてってよ。あ、もちろん質より量優先で。」

「うん！とびつきり美味しいお店探しておくね！」

最終的にシードもフェイトも仲直り出来たようで、フェイトもシードのお願いに笑顔で承諾していた。

「そうだ！どうせ外食に行くなら皆で行かない？フェイトもそっちの方が楽しいでしょ。」

「…………え？う、うん…………エリオ、キャロ、そういう事なんだけど、どうかな？」

シードの提案に、フェイトは一瞬困惑したような顔をし、またいつもの笑顔に戻った。

この変化に気付いたエリオとキャロは顔を見合わせ、またシードとフェイトの方へと向く。

「折角のお誘いですが、僕は次の休暇の時にキャロと二人でショッピングに行く約束をしていたので……………」

「すみませんが、シードさんはフェイトさんと”二人で”楽しんできて下さい。」

「そっか…………それじゃあなのはやスバルにティアナでも誘っ……………」

「”二人で！！”楽しんできて下さい！」

「……………でも大勢で行った方が楽し……………」

「フェイトさんみたいな綺麗で可愛い女性を誘っておいて、更に他の女性を誘うなんてフェイトさんに失礼です!!」

「……………は、はい……………すみません……………」

キャラの強引な押しに押されたシードは、キャラの剣幕に若干後ずさっていた。

因みにフェイトは、キャラに綺麗だの可愛いだの言われて顔を真っ赤にしていた。

「キ、キャラ!べ、別に私はそんなこと気にしないよ!？」

フェイトが反論すると、キャラがフェイトに近づいて耳元で囁く。

「頑張ってくださいね……………」

「……………!!?な、ななな何を!?!?な、何を言ってるの!?!?」

「……………???」

キャラに囁かれ、突然フェイトが大声をあげたので、シードは訳が

分からず口を開けたまま、ボーツと狼狽するフェイトを見ていた。

そして今度はフェイトも声を小さくし、フェイトとキャロの二人で内緒話を始めた。

（シードさん、このままじゃなのはさんに取られちゃいますよ？この前だって訓練終わった後一緒に戻って来てましたし。）

（え、えええ！？つて、まずなのはってシードのこと好きだったの！？）

（多分……もしかしたらその逆もあるかもしれません……）

（そ、そうなんだ……じゃ、じゃあ応援した方が……）

（いつまでそんなこと言ってるんですか！本当はシードさんの事……）

「わあああああ！！！！わあああああ！！！！聞こえない！！聞こえない！！！！！！」

以上、親子の密会、終了。

キャロに言われるだけ言われて、フェイトは眼に涙を溜めて泣きそうになっていたため、エリオがキャロを止めに入り、シードはフェイトの側に寄って慰めようとする。

だが、シードにとってはその行動が命取りとなった。

「シードくん……何フェイトちゃんを泣かせてるのかなあ？」

正確には管理局の白いあく……エースオブエースに鉄槌を下されていた。

「つまり、フェイトちゃんを泣かせたのってキャラだったの？」

「はい……すいません……」

スターズの訓練も一段落ついたのか、なのはの後ろにはスバルとデアナの姿もあった。

ただ、二人共ボロボロになっていたが。

「な、なのは、もういいよ。第一私の事でキャラが相談にのってくれてたんだし。あと私は別に泣いてないよ。」

「フェイトちゃんがそう言うなら良いけど、相談にのってもらって泣かされるってどういう状況なの？あとフェイトちゃん泣いてたよ。」

「別に私は泣いてないけどね。」

「……どうしてそんなに泣いてないって言い張るの？」

どうやらフェイトは是が非でも自分は泣いてないと言い張るつもりらしい。

等と話していると、ガサガサと草を掻き分ける音と共に大柄の男性が現れる。

「まったく、お前らはホントマイペースだなあ、おい。」

「げっ！！レ、レオン隊長！？」

「お、お久しぶりです、レオン三等空佐。」

「高町もシードも嫌な顔すんなよ！てか高町はともかく、シードは露骨過ぎなんだよ！」

レオンと呼ばれた男性は、先程六課の隊舎の前に居た赤髪の男性の事だ。

なのはとシードは嫌がりながらも、階級としては上司にあたるため、敬礼をしていた。
嫌がりながら。

フェイトも敬礼をしていたが、FW陣の四人はレオンの事を微塵も知らないらしく、スバルがフェイトに小声で質問をしていた。

（あの、フェイトさん。あの人って誰なんですか？私達より偉いつていうのは分かるんですけど……）

（まあ、知らなくても仕方ないかもね。レオン三佐はあまり表に出たがらないから）

「おい。ハラオウンの嬢ちゃんにその青いの。聞こえてるぞ。」

「「す、すいませんでした！」」

確かに二人はレオンに聞こえない様に、小声で会話していた。それでも聞こえたという事は、それだけで彼がどれだけ異常かが分かる。

「まあ、確かに俺は高町やハラオウンの嬢ちゃんみたいに有名じゃないからな。知らなくて当たり前だから、気にするな。」

「はあ……」

レオンの傲岸な態度にたじたじなスバル。だが、シード等は慣れているらしく、普通に笑っていた。

「まあ自己紹介はした方がいいか。俺はレオン・トライバル三等空佐。1321航空部隊の隊長をやっている。よろしくな！」

「初めまして！機動六課スターズ分隊所属のスバル・ナカジマ二等陸士であります！」

「同じく、スターズ分隊所属のティアナ・ランスターです！」

「同じく、ライティング分隊所属のエリオ・モンディアルです！」

「同じく、ライティング分隊所属のキャロ・ル・ルシエです！」

一通りの挨拶を終わらせた後、レオンは値踏みでもするかのように四人を見つめる。

「なるほどな。中々面白そうな奴等だ。ん？ちよい待った。その二人、ナカジマとランスターだったか？」

「は、はい。」

途端にスバルとティアナの表情が強張る。

何か失礼な事でも言ったかと、二人はとても不安がっていた。

だが、二人の考えていた事とは真逆の結果だった。

「おおお！！てことは、あのゲンヤさんの娘さんと、あのティードの妹か！？二人共聞いた通りだな！」

「え？ど、どういことですか？」

「トライバル三佐は兄の事をご存知何ですか！？」

「知ってるも何も、ティーダは俺の同僚だ！んでもって、ゲンヤさんは俺の元上司だ！」

「え？父さんの部下だったんですか！？」

「ああ。今じゃ同じ階級だが、今でもあの人は尊敬してる。」

スバルは自分の父の事を誉められて、とても嬉しそうだった。ただ、ティアナは違った。

「あなたも……………」

「ん？どうした、ランスター？」

「あなたも兄は無能だと思いますか？兄の魔法は無力だと思いますか？」

「……………」

ティアナの兄であるティーダは、とある事件を追っている時に、犯人に殺され殉職する。

その時、同僚に無能扱いされた兄の代わりに、兄の魔法は無力ではない、という事を証明するためにティアナは管理局に入った。

レオンも兄を無能だと卑下したのかと、ティアナは考えていた。

「よし、一つ話をしてやろう。」

「え？」

「俺は武装隊の士官学校に居たときからティーダと一緒に居たが、あいつは天才だ。百発百中と言っても良いほどの射撃テクニクに何度助けられた事が。」

「……………」

ティアナは、自分が考えていた返答とは真逆の結果になって呆けていた。

ただ、レオンが話を進める度にティアナの眼には涙が溜まっていった。

「まあ他にも語りたい事はいくらかでもあるが、一つだけ言える事がある。あんな凄い兄貴が居るんだ。生涯誇っても良いんじゃないか？」

「……………っ！！失礼します！」

そう言って、ティアナは森の奥へと駆け出していった。

「ティアア!!」

スバルもティアナの後を追い、エリオとキャロも心配らしく、走ってスバルとティアナの後を追っていった。

「ホント変わってませんね、レオン隊長。」

「うるせえ! こういうの苦手なだけだなあ。」

そう言って頭をガシガシ掻くレオンは、清々しく笑っていた。

「ところで、レオン三佐は何故ここに?」

「おおっと、高町のおかげで思い出したわ。」

「今まで忘れてたんですか……」

「今日お前らに会いに来たのは、八神の嬢ちゃんに頼まれたからだ。」

「頼まれた?何をですか?」

「お前の魔導師ランク測定試験の試験官をだよ!」

レオンの指差した先に居たのは、シードだった。

「……………え？」

NO・6 隊長と元先輩と知り合いと（後書き）

いやー新キャラですよ、設定ダルいですよ！

しかもレオンさんキャラ固まってない！

しかもシードとフェイトの二人何かイチャイチャさせちゃったし！
これもうフラグだろ！

ええ、ええ、書きますとも！シードとフェイトのデート書きますとも！！

レオンと他のキャラの関係分かりにくい！という方は最初に投稿した「キャラクター設定」に書いてあるので、そちらを参照して下さい。

レオン「いやー、やっと俺の出番か！」

シード「でもキャラ固まってないみたいですよ？」

フェイト「しかも設定ダルいらしいですよ？」

レオン「何で二人して俺の悪口言うんだよ！？」

シ・フェ「いやー何か心配で……（どうせ試験終わったら消えるんだから早く消えてほしい。）」

レオン「言ってる事と思ってる事違う！！てか、仲良いなあおい！」

まあ、ギャグシーンではこんな感じのキャラになりますが、真面目なパートでは真面目な事言います（笑）

さて次回予告

レオンとシードのバトル。

レオンの厄介な戦闘スタイルにたじたじなシード

さて、今回はこんな感じしか考えてませんが、出来るだけ早めに投稿していきます！

NO.7 Examination start!

「シードside」

小さい頃に見ていた光景を思い出す。

曇天の空に、地面に転がった幾つもの死体。自分の体に出来た刀傷を手当てすることなく、新たにやってきた部隊を潰すべく刀を振るう。

そんな戦場での出来事を、彼を見ていると思い出す。

「よし、こっちは準備OKだ。シードも準備が出来たら言ってくれ。」

レオン・トライバル三等空佐。

僕の所属している1321部隊の隊長にして、今では使用する人自体希少な古代ベルカ式の使い手。

彼は準備運動がてら、自分の黒い長槍型のアームドデバイスを振り回していた。

僕が昔の事を思い出すのは、彼が古代ベルカ式の使い手だからか。それとも、彼が持っている武器が”あの人”の武器とそっくりだからだろうか？

”勝て。負けを認めるな。一度の敗北は十の勝利で書き消せ。”

頭に浮かぶ”あの人”の声。

だが、今更そんなこと言われなくても分かっている。

「……………行くよ、アブソリュート。」

『Yes , s i e .』

頭に響く”あの人”の声を振り切る様にセツトアップを済ませ、バリアジャケットを纏う。

僕はモニターを出してなのはへ連絡をする。

「なのは、こっちは準備出来てるけどそっちはどう?」

『こっちの準備も終わったよ!』

「了解。」

なのはが準備していた物は、僕とレオン隊長の頭上にある幾つものサーチャーだ。

サーチャーを使ってあらゆる角度から僕らの戦闘を見て記録する、という訳だ。

『それにしても、はやてちゃんも強引だね。本人に確認もせず試

験の日程を決めちゃうなんて。』

「まあ、今日は緊急の用事がなかったから良かったけど……」

何時のまにレオン隊長に頼んだかは分からないが、本当に迷惑極まりない。

「そういえば、ティアナはどう？」

『それが…まだ戻ってこないの。さっきエリオとキャロが戻ってきたけど、スバルとティアナはまだ。』

「そっか……………」

『ダメだよ、シード君。今は試験だけに集中しないと。』

それは分かっている。

確かにティアナの事は心配だけど、戦闘に支障を出すほどでもない。それに、機動六課の中では最も彼女の事を分かっているスバルがついている。僕が心配する必要はないだろう。

「大丈夫だよ、なのは。」

『なら良いけど……』

「おい、高町の方も準備出来たのか？いい加減待ちくたびれたんだ

が……」

先程までずっと槍を振り回していたレオン隊長だが、どうやら準備運動は済んだらしい。

『すいません。こちらの準備も今終わりましたので、何時始めてもらっても大丈夫です。』

「分かった………そいじゃあ………」

なのはと喋りながら槍を構えるレオン隊長は、どこか笑っている様に見えた。

そして、その笑みがこちらに向けられる。

「始めようかあー!!」

「side out」

キンキンキンキン!!

止むことのない槍撃を、全て刀で防ぎきるシード。

突き、切り上げ、降り下ろし、さらには回転切りまで繰り出すレオン。

「そろそろあらあ！！どうした！？この程度の攻撃、お前なら軽々避けられるだろう！！」

「……………っ！！」

シードも避けようとしたり、間合いをとったりしようとはしていた。だが、レオンがそれをさせなかった。

シードが間合いをとろうと後ろに飛び退いた瞬間、レオンが前に跳び戦いやすい間合いまで詰め寄り、シードの着地の瞬間を狙ってまた一方的な攻撃が始まる。

キンキンキンキン！！！！

（くっ！このままじゃ確実に体力を削られていく……ホントこの人の戦い方はねちっこいなあ、もう！）

後半はともかく、このまま一方的な攻防をしていると、最終的に体力面で若干劣るシードが疲れを見せ、動きが鈍って負ける事だろう。

この状況打開のためにする事は、

（レオン隊長に隙を作り、一旦間合いを空ける！）

その結論に至ったシードは、先程と同じ様に間合いをとるため後方へ飛び退く。

「馬鹿の一つ覚えもいい加減にしろ!!」

そして、レオンも間合いを詰めようと、シードのアブソリュートが届かず、尚且つ自分の槍が届く絶妙な距離まで跳ぶ。

レオンが槍でシードを貫こうとした時、シードの刀がレオンへと向けられる。

だが当然ながらレオンに届く事はない。

シードの行為を、レオンは最後の悪あがきかと思った瞬間、

「少しは休ませて下さい!!」

レオンに向けられた刀の剣先に、環状魔方阵が作られる。
シードが環状魔方阵の中心に魔力を集中させると、

『Strike lancer』

ドオオオオオン!!!

緑色の直射型射撃魔法が剣先から放たれ、レオンに直撃する。

ほぼ零距离のため避ける事はかなわず、直撃したレオンは吹き飛び、地面を転がる。

「はぁ…… やつと少しは休めそうだ……」

「ほう…… そんなに休みたかったのか？」

「ええ、そりやもう…… 立ち上がるの早すぎませんか？」

シードに話しかけてきたレオンは、先程まで地面を転がっていた筈なのに、既に槍を構えていた。

「俺の場合高町やハラオウンの嬢ちゃん等より魔力量が少ないからな。その分体を鍛えてるから頑丈なんだよ。」

「それにしたって……」

「まあ、体が頑丈なものもあるかもしれんが、どちらかと言うと咄嗟に張った防御魔法のおかげだろうな。」

「どちらかと言うと、というよりその防御魔法のおかげでしょう。」

レオンは射撃魔法が当たる瞬間、防御魔法を張っていたらしく、体の所々に傷があるものの大きな怪我は見当たらない。

「さてと……お前に高速移動魔法を使わせないために絶え間無く攻め立てたが、こうなった以上普通に攻めてもお前なら軽々避けるだろう。」

レオンの予測通り、シードはレオンが攻めてきた瞬間後ろに回り込む、という戦法を考えていた。

だが、普通の攻撃では避けられると分かっていた所で、レオンの持っているデバイスは槍型だ。

相手にある程度接近して、突く。

槍を使う者にとってこれ以上の攻撃は無い。

だが、レオンの”突き”は普通では無かった。

「さてと、こうなったら通用しそうなのは奥の手だけだな。まあ、もしかしたらこれも避けられるかもしれんが………」

そう言つて、レオンはその場で虚空に突きを繰り出す。

シードは首を傾げたが、次の瞬間正面から”何か”が風を切つて迫ってくるのを感じた。

シードはその感覚に頼って体を捻る。

すると、”何か”は先程までシードの頭があつた場所を通つて行き、進行方向上にあつたビルの壁面に当たる。

だが当たつたというよりは、何かで貫こうとした、と言つた方が正しい。

「今のつて、もしかして……………」

「ああ。槍の”刺突”を魔力に乗せて飛ばしたんだ。細工付きでな。」

先程シードの側を通過した”何か”とは、レオンの刺突を魔力に乗せて飛ばした物だつた。
そのためビルの壁面に穴が開いたのだ。

「まあ何とかして、避けきるなり防ぎきるなりしろよ!」

すると、レオンはその場で突きの練習でもするかのように連続の突きを繰り返した。

「side out」

「なのはside」

私の正面にあるモニターではシード君が目に見えない刺突を避け続けている。

第三者からの視点では何をやっているのかサッパリ分からないけど、シード君の後ろにあるビルの壁に出来たたくさんの傷跡が全てを物語っていた。

食い入る様にレオン三佐とシード君の戦いを見ると、隣でモニターを見ていたスバルが話しかけてきた。

「あの、なのはさん。そんなに難しい顔して、そんなにシードの事気になるんですか？」

「えっ？私そんなに難しい顔してた？」

周りの皆に聞いてみると、満場一致で頷かれちゃった。

「難しい顔してたかどうかはともかく、シード君だいが追い詰められてるからね。やっぱり心配、かな。」

「え？シード追い詰められてますか？確かに見えない遠距離攻撃って私やエリオみたいな近距離タイプには厳しいけど、シードには得意の高速移動があるじゃないですか！」

「よく見てれば理由が分かると思うよ。」

私はそう言ってもニターの正面から退き、FW陣の四人に譲る。
四人共食い入る様にレオン三佐の槍捌きと、シード君の動きを見て
いると、スバルが呟く。

「もしかして、時間差攻撃……………？」

時間差攻撃。

シード君に飛来する攻撃は見えないため断言は出来ないけど、二人
の動きを見ているとレオン三佐が時間差攻撃を行っているのでは、
という結論に至った。

多分レオン三佐が言っていた細工とはこの事だと思う。

すると、スバルが疑問をぶつけてきた。

「でも、シードにはお得意の高速移動魔法があります。それを使え
ば全部避けられるんじゃないですか？」

「スバルの言うことにも一理あるけど、レオン三佐の遠距離攻撃は
見えない攻撃。そうなると、シード君は風を感覚で読み取って避け
るしか無いはず。ただその避けかただと、レオン三佐の攻撃を体の
側まで引き付けてからじゃないと避けられないはず。」

「つまり、いつどここの箇所に攻撃が来るか分からないから、下手に
動けないって事ですか？」

「うん。勢いで横に移動して、そこにも攻撃が来てたら直撃しちゃうからね。」

説明をしつつモニターに目を向けると、シード君の体には所々かすり傷らしきものがあつた。

……シード君……大丈夫かな……

「side out」

「フェイトside」

皆がモニターを見詰める中、私は端で熱心にモニターを見ているのはとシードを交互に見て、さっきキャロに言われてた言葉を思い出していた。

”シードさん、なのはさんにとられちゃいますよ?”

別に私がシードの事を好きって訳じゃないけど、なのははどうなんだろ?

キャロの言った通り、シードの事好きなのかな?

逆に、シードは私達の事どう思ってるんだろ?

以前男子と女子の間で友情は芽生えない、って話を聞いたことある

けど、シードは私達の事どういう目で見てるんだろ？

ハッー！！

私達って言えばはやては！？

シードとはやてって時々言い合いしてて仲悪そうに見えがちだけど、喧嘩するほど仲が良いって言うし、二人で食事したりしてるらしいし……………

それになのはだって家庭的で優しいし、可愛くて綺麗で……………

「フェイトちゃん、何独り言言ってるの？」

「何でもない！何でもないのー！」

も、もしかして最初から最後まで喋ってた！？
は、恥ずかしい……………

ドオオオオンー！！

「あつ！なのはさん、フェイトさん、シードg……………」

バツー！！

「そ、そんなに急がなくても……………」

スバルの声を無視して私となのははモニターに食い付く。

そこには、ビルの壁に叩き付けられたシードが何とか立ち上がろうとしていた。

「side out」

「シードside」

レオン隊長の一撃が入った腹部を押さえつつ、所々傷ついた体を何とか立ち上がらせる。

恐らくレオン隊長は手加減をしてくれたのだろう。
そうでなければ、とつくに気を失っていた事だろう。

「おいおいシード。お前去年より弱くなったんじゃないのか？」

手加減された上にこの余裕顔。

正直めちやくちゃム力つく……………

” 勝て。負けを認めるな。一の敗北は十の勝利で書き消せ。”

頭に響くこの言葉。

面倒くさい様に聞こえるこの言葉。だが本来はとても簡単。

要は勝てば良いのだ。

一度の敗北も、敗走もせず、勝利を勝ち取る。
自分の出せる全ての力を叩き付けて……

僕は強くなりたい。

強くなるためには勝つ。

勝つためには……全力を出して……

「……はあ、うだうだ悩むの止めよ。」

「何だ、難しい顔してたと思ったら戦闘中に考え事か？」

「はい。でも、もう止めました。勝ってから後悔する事にしました。」

そうだ。

勝った後で、やらなきゃ良かったと後悔すればいい。今は目の前の相手のみに集中すればいい。

「ほう……いつになく強気だな。秘策でもあるのか？」

「そんな大層なものじゃありませんよ。ただ……」

そう……ただ……

「久々に”全力”を出してみようかな、と思いまして。」

”全力”を出して後悔するだけだ。

NO.7 Examination start! (後書き)

いやーこのSSもシヨボいながらも細々と続けて早七話! (そんなに行つてねえ!)

ついにPV10000突破でござえますよ!!

え? そんなのシヨボいつて?

言つておくが私は小心者だ! 10000行つただけでもクチャクチャ嬉しいんだ!

という訳で次回、ついにシード君お待ちかね100%ですよ!

つってもそこまで変わらないかもしれませんが(*ー*)

シグナム「おかしいな……つまり、私との戦いでは本気を出さなかった、という訳か?」

シード「お、落ち着いて下さい! 色々事情があつて、ネタバレにならない程度で言うならば……次回は……その……げ、限界突破? するんで……別にシグナムさんに全力を出さなかった訳では……」

シグナム「……紫電一閃!!!」

ちなみに、シードが言った事は案外的を射ておりますw

NO・8 勝利をこの手に！

シードとレオンが戦いを繰り広げている場所から少し離れたビルの屋上。

そこには、なのはにフェイト、FW陣の合計六人のメンバーがモニターを見つめていた。

「ねえティア、さっきシード何か言ってた？」

「え？私は聞こえなかったけど……………」

「それなら、僕もシードさんの声は聞こえたような気がするんですけど、何て言ってたかまでは……………」

「シードさんと三佐、小声で何か喋ってるみたい。」

FW陣があれこれ議論をしている間も、モニターに映るシードとレオンは会話していた。

「あつ……………」

その時、なのはが何かに気が付いたらしく、間の抜けた様な声をあげた。

「どうしたの？」

「フェイトちゃんも見てみたら分かるよ……………」

呆れ果てた顔でモニターの側から離れるのは。

なのはと入れ替わる様にフェイトがモニターを覗き込むと、そこには笑顔でこちらを、正確にはシード達の周辺に設置したサーチャーを眺めているシードの姿。

「……………」

全員啞然としていた。

だが、模擬戦とはいえ仮にも戦闘中に相手に背を向けるなど通常では考えられない。

何を考えているのか全く分からない笑みを浮かべ、まるで値踏みでもするかの様に周囲のサーチャーを見回している。

そして、シードの姿がぶれた瞬間、モニターの画面が砂嵐に変わる。

「…………シード君…………サーチャーを壊していつてる？」

この場に居る全員が啞然としている間も、シードは訓練場のサーチャーを破壊し続けている。

そして、唯一残っていたサーチャーも壊され、シードとレオンの姿は完全に確認出来なくなった。

「な、何でシードはこんなこと……………」

「考えられる事としては、見られたくない魔法を使う、とか？」

「でも、見られたくない魔法ってどんなもの何ですか？」

スバル、ティアナ、エリオが話す中、何かを思い付いた様にキヤロが呟く。

「……………レアスキル……………？」

レアスキル。

現代では使う者が少ない技術をレアスキルと呼ぶ。
ちなみに、古代ベルカ式の魔法を使用する者もレアスキル所持者とされている。

「でも、シード君はレアスキル何て……………」

『マスター、少々よろしいでしょうか？』

なのはが言いかけた瞬間、レイジングハートがなのはに話しかける。

「どうしたの？」

『未知の魔力反応を感知。かなり強力な反応です。』

「それって、もしかして敵襲！？」

その一言で空気が変化する。

先程までのまったりした空気から一変、張りつめた空気になり、F
W陣がセットアップしようとしていた。

だが、レイジングハートの話は続いていた。

『ですが、酷似した魔力反応を示す人物は居ます。』

「えっ？それって誰？」

『シード・ウエンハイム二等空尉です。』

時は少し遡り、シードがサーチャーを破壊してレオンの下へ戻ってきた所。

レオンはシードが何をしたいのかサッパリ分からず、怪訝な顔をし

ていた。

「シード、サーチャーを壊して、一体何をするつもりだ？」

「まあ見てて下さい。」

レオンの質問を受け流しつつ、シードは自然体で立ち、目を瞑る。

かといって、呪文を唱える訳でもなく、謎の儀式をする訳でもなかった。

普段魔法を使うように、足下にベルカ式の魔法陣を構成させるシード。

「おいおい、まさか不意打ちしようってんじゃないだろうな!？」

「……………」

「まったく、無視かよ……………」

シードに無視をされ、バツの悪そうな顔をするレオン。
だが、

パキイイイイン

という音と共に、彼の顔はすぐさま驚嘆の表情へと変わる。

「……おいおい、冗談だろ………何してんだ？」

レオンの驚きは、初めてシードを目にする者には全く分からないだろう。

一般的な男性の体、足下に構築されたベルカ式の魔法陣。どれも管理世界では特に珍しくない。

レオンが驚いた原因は、シードの体から溢れ出る魔力とベルカ式の魔法陣の”色”だ。

シードの魔力光は本来翠だった筈だ。

だが、今シードの魔力光は紅に染まっていた。

「ふう………準備出来ました。始めましょうか。」

「あ、ああ………じゃなくて、お前今何しやがった！？何で魔力光の色が変わるんだ！？」

「ああ、これは訳あり何でスルーしてください。」

「出来るかつ！！それにその魔法陣、近代ベルカ式じゃなくて古代ベルカ式じゃないか！！」

「やっぱり、古代ベルカ式の使い手なら分かっちゃいます?」

シードの足下の魔法陣は先程と何ら変わっていないように見えるが、レオン曰く古代ベルカ式の魔法陣になっているらしい。

「ったく、どういう事が説明しやがれ!」

「いや、言いたくないんですけど……だったら、レオン隊長が僕に勝てたら包み隠さず説明します。引き分けたり、僕が勝った場合はこの事は誰にも喋らない、という事でどうでしょう?」

「何?……いつになく強気じゃないか。この俺に喧嘩売ってんのか?」

先程までの困惑した顔から一変、挑発的なシードに負けじと笑ってみせたレオン。

だが、本音はかなり困惑している事だろう。

本来変化するはずのない魔力光の色が変わったのだ。

開発局のトップでも、この現象を説明する事は出来ないはずだ。

シードはいつも通りの抜刀術の構え、レオンは腰を少し屈めて構えていた。

「……誓えよ。俺が勝ったら事情を説明するって……」

「誓うもなにも、自分で言い始めた事なんだから今更曲げませんよ。」

「ならいいんだが……お前の事だから、都合の悪い情況になったら有ること無いこと織り混ぜてはぐらかすに決まってる。」

「その前例が有るような言い方は止めてください。そんなことした覚えはありませんよ?」

「前例があるから言ってるんだ!前に1321部隊で犯罪組織を潰しに行った時だって、お前とヴィータの二人だけで物的証拠を破壊しまくったあげく、正論っぽい事言って上層部の奴等全員納得させやがったじゃねえか!」

「昔の事をネチネチ掘り返すなんて、男らしくないですね。」

「お前が言わせたんだろうが!」

以上、上司と部下の馬鹿な会話、終了。

「まあ何にせよ、とつとと終わらせようぜ。」

「同感です。いい加減空腹が我慢の限界を越えそうで……」

「腹減ってるだけかよ!」

「最近更に燃費が悪くなったみたいで……」

「だったら……とつとと終わらせてやる!!」

シードの態度にいい加減呆れ果てたのか、レオンが先程と同じく見えない刺突を飛ばし始めた。

『p r o t e c t i o n』

だが、シードは避けようとはせず、正面に防御魔法を張るだけだった。

「どうしたシード！お前の苦手な防御魔法で、俺の攻撃を長い間防ぎきれると思うか!？」

シードは返事をせず、防御魔法に集中していた。
そのおかげで、今のところは防御魔法にはひび一つ無いが、それも時間の問題だった。

となれば、シードがとれる行動は一つ。

防御魔法を張りつつ、高速移動でレオンの背後に回り込み、一気に勝負をつける。

そして、その考えはレオンにも先読みされていた。

（だが、あのシードがそんな簡単な戦法を取るだろうか？）

いくら高速移動が速くとも、事前に来る場所がある程度分かれば、レオン程の騎士なら対処出来る筈だ。

シードもそれくらいは分かっている筈。

とはいえ、レオンは高速移動魔法以外のシードの戦法を知らなかった。

機動六課に来てからもだが、シードの戦法は高速移動魔法を軸に成り立っていた。

空中ならソニックムーブ、地上ならブリッツアクションといった具合だ。

だから、レオンの思考も仕方ないと言えは仕方ない。

だが、この時レオンは別の可能性も考えるべきだった。

「レオン隊長お！」

「何だあ！？」

未だに防御魔法を張り、打開策が無い様に見えるシード。

だが何か考えがあるのか、ミッド式の防御魔法に切っ先を突き立てる様に刀をレオンへ向けていた。

アブソリュートの刀身に環状魔方阵が四つ程構成され、更に切っ先から巨大な環状魔方阵が一つ作られた。

その横幅はおよそビル一つ分もあった。

その異様な大きさに、レオンは思わず手を止める。

「……お、おい………シード、まさか………！」

巨大な環状魔方陣に魔力を集中させ、”砲撃”の準備をする。

「これ結構魔力消費キツいんで、避けないでください、よっ……！」

『Strike smasher!』

ドオオン……！！

巨大な環状魔方陣の先から、真紅の砲撃が射出される。

あまりの巨大さに、防御魔法を張ったレオンごと飲み込み、更に奥に建っている数々のビルを貫通し、幾つものビルが瓦解していった。

「ああ……きつつ………もう動くのも憂鬱………」

巨大な砲撃を撃った反動が、フラフラしているシード。

土煙が晴れてくると、かろうじて立っているレオンの姿が見えてきた。

「……ハア、ハア………お前、砲撃なんて撃てたっけ？」

「まあ一応は。」

悲痛なレオンの質問に、そっけなく答えるシード。

「どうします？まだ続けますか？」

「まったく、何バカな事言ってるんだ……まだまだ戦えるっつーのに……」

「……ホントタフなんだから……」

「……行くぞ、シード。」

「……ええ、何時でもどうぞ。」

シードはレオンに呆れつつ刀を構え、レオンも傷だらけだが何とか槍を構える。

「A・C・S……セット……」

『A・C・Sセット』

レオンは腰を屈め、槍の穂先に魔力を集中させてA・C・Sの準備をしている。

槍の真髄である突きを最大限に生かすには、確かにA・C・Sが最

も適しているだろう。

「……………アブソリュート、少し無茶するけど我慢して。」

『余裕です。』

「……………カートリッジロード……………魔力素集束、開始。」

ガシャンガシャン！！

二発のカートリッジが装填されたアブソリュートに、周辺に散布された大量の魔力素が集束されていき、刀身が紅く輝く。更にアブソリュートを鞘に納め、抜刀術の構えをとる。

『A・C・Sセット完了』

「フルドライブ……………A・C・Sドライバー！！」

槍を前に突きだしたまま、レオンがA・C・Sを使いシードへと突進する。

一方シードは、アブソリュートを鞘に納めながらも集束を続けていた。

『魔力素集束終了。ブレイカー完了しました。』

「……聖剣流、第三式……」

「これで終わりだ！シールドオオ！！」

「……………霸斬一閃……………」

ギイン！！！！

両者が一瞬のみ交差し、武器の金属音が鳴り響く。

シールドは抜ききった刀を再び鞘に納刀し、レオンも前方に突きだしていた槍を引く。

だが、その槍は穂先が無く、槍の先には綺麗な切断面だけが見えた。

「……………つたく、人のデバイスぶっ壊しやがって……………まさか後輩に負けるなんて夢にも思わなかったぜ……………」

そう言い放ったレオンの顔は、思いの外清々しく見えた。

だが……………

「……………いえ……………僕の負けです……………」

「はあ！？お前、どの口が言いやがる！？」

シールドがデバイスを待機状態に戻すと、自分の負けを告白した。
案の定、自らの負けを自覚しているレオンは怒り出す。

「俺は全力を出してもお前に傷を付けられず、お前はさっきの攻撃で俺のデバイスを切り落とした！模擬戦でこれ以上の負けがあるか！！」

どれだけ反論しても、シールドは首を横に振るばかり。
そして、唯一放った言葉が……

「それが……無理しすぎて……ブラックアウトしかけてるんですよね……………」

ドサッ

悲壮な顔を浮かべながら倒れるシールドを、呆れながら見ていたレオン。

だが、流石に放置しておくのもマズイと思ったのか、なのはとフェイトに念話をし始めた。

「（高町、ハラオウン、シールドが無茶しまくってブラックアウトしやがった。直ぐ来てくれ。）」

「（ブ、ブラックアウト！？シード君、そんなに無茶してたんですか！？）」

「（す、直ぐ行きます！その間、シードの事お願いします！！）」

念話が終わると、レオンは突っ伏したシードの横に座り込む。

「本当ならこのままお前を医務室まで引きずって行きたい所だが、俺もだいぶキツいんで高町達が来るまで休ませてもらうわ。」

レオンはまるで、独り言の様にシードに語りかける。

レオンが首を上に向けて空を仰ぎ見ると、青い空がどこまでも続いていた。

その青空を見て、レオンが一言。

「今朝の天気予報、曇りつつてたのになあ……………」

NO・8 勝利をこの手に！（後書き）

遂に、遂に出てきたシードの裏事情！

まるで駄キャラの様に次回から出番の無くなるレオン隊長！

こんな感じで終わらせた、と自分では思っていたのですが、読み返してみると自分の文の稚拙さに思わず本当に穴の中に入りかけました（笑）

話変わって、10000PV突破したので何か記念回やろうかなあ、と考えています。

今の所話のネタには困っていませんが、最近色々と忙しく、更新が遅れがちになってきております。

ですが、それでも読んでくださる方にはとても感謝しておりますm

（ m

NO・???をNO・18、とローマ数字を普通の数字に改変します。

特に記載する事では無いかもしれませんが（^-^）；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1173x/>

魔法少女リリカルなのはstrikers ～ 聖王の刃～

2012年1月5日09時52分発行